

実施の効果

1. 子どもの変化

1) 松原第七中校区

効果検証の方法

私たちが人間関係学科の実施において大切にしてきたことは、子どもたちの「気づき」と「ふりかえり」であり、その「わかちあい」を通じ子どもたちの成長を確認してきた。毎回の人間関係学科の授業後に子どもたちが書いた「ふりかえりシート」から、子どもたちの「気づき」をひろいあげ、「わかちあい」として子どもたちの中に共有化してきた。また、授業そのものに対しての子どもたちの評価をデータ集積し、授業の内容づくりや子どもたちの状況分析に活用している。

また、各学期末には学校生活調査・学校生活アンケートを実施し、子どもたちの状況や学校生活にどのような変化があらわれているかを確認している。

本年度、各校の効果検証の取組は基礎データづくりに重点を置いてきた。蓄積している基礎データは、[1]「あてはまる」「あてはまらない」の率の推移、[2]得点推移の2種類である。この2種類のグラフをベースにしながら、統計ソフトなどを活用し、子どもたちの変化を追っていった。

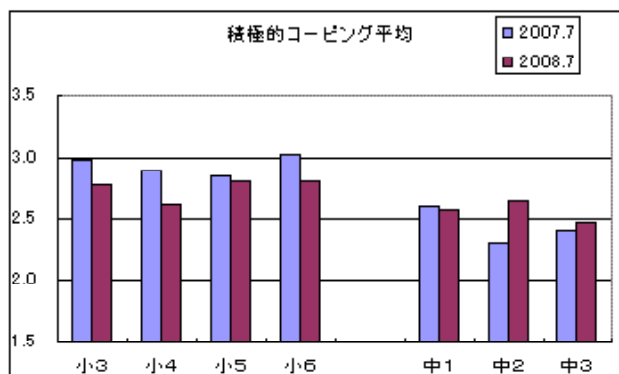
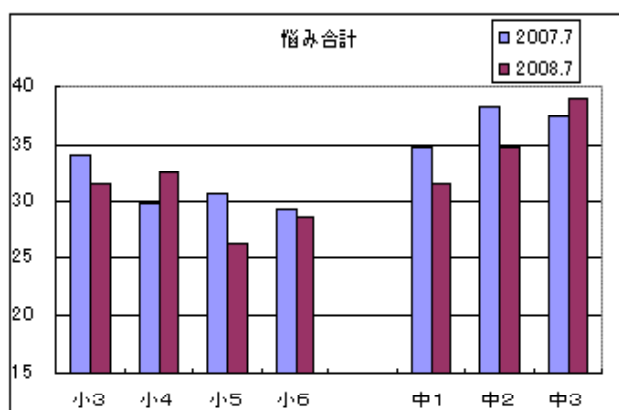
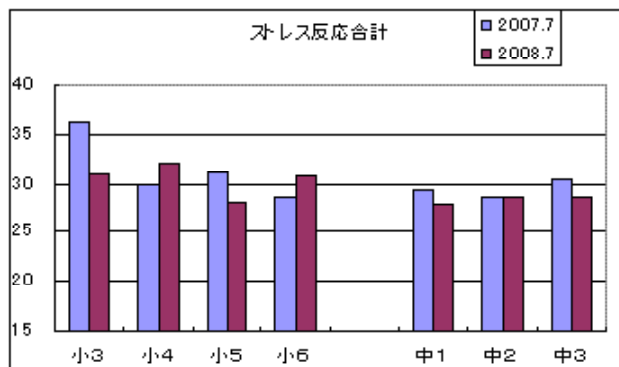
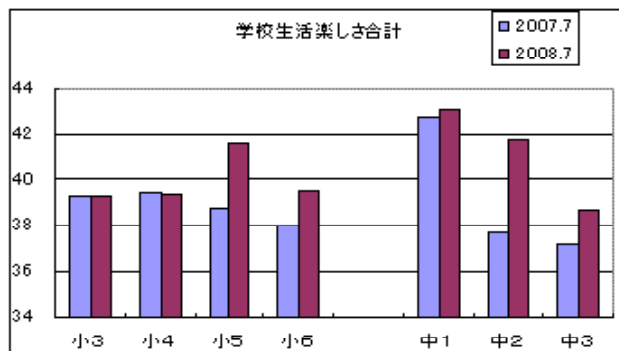
今回の効果の検証においては、学校生活調査・学校生活アンケート、学校教育自己診断などの調査結果をもとに、子どもたちの変化から効果を検証するとともに、子どもたちの集団という意味でのそれぞれの学年という観点で見た効果を検証していきたい。

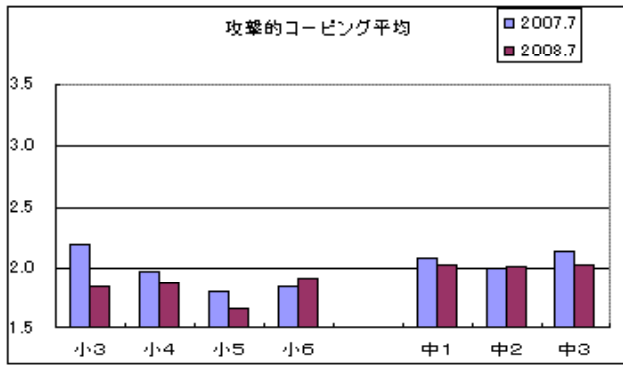
小学校～中学校の得点推移

昨年度一学期より、松原七中校区として学校生活調査・学校生活アンケートのデータを集積し、校区としての効果測定に取り組んでいる。アンケートの項目内容や項目数には小学校と中学校の内容には発達段階に応じた若干の違いはあるが、校区として同じ目的で同じ時期にアンケート調査に取り組んでいることに意味がある。小学校・中学校の違いは何なのか。感覚的には、述べることはできても、本当のところどうなのか、ということに関しては、自信をもって語るができなかったのが現実である。今回の研究開発学校の指定を松原七中校区で受けたことにより、共通の尺度の基礎データの作成が可能になり、比較はもとより、効果測定の結果も共有が可能となった。小学校・中学校の比較データの蓄積が浅いため、本質的な

部分が見えるまでには時間がかかるのであろうが、そこから見えてくることからの課題提起は小学校・中学校の相互理解と壁をとりはらっていく上で、極めて重要なものであると思われる。今回は、主な項目に絞ったデータ比較から見えてくることを検証していきたい。

比較にあたっては、同時期の調査ということで、2007年度7月調査と2008年度7月調査の2回の調査結果を抽出した。





まず、調査方法についてであるが、小学校は4件法、中学校は5件法でおこなっている。この比較に際しては4件法から5件法への換算を行い、5件法の数値に合わせていることを断っておく。

学校生活楽しさ度の合計得点についてである。「あてはまる・あてはまらない」の率の推移を見たとき、「あてはまる」は小学校では80%超、中学校では70%前半というのが現在のスタンダードな割合である。この意味で、全体的な数値が小学校より中学校のほうが高いという結果は驚きであった。一目見てわかるように、高学年の5・6年において、大きく上昇している。教員と子ども、子どもと子どもの関係性が人間関係学科の成果として高まっているのであろう。小学校においては、学年が上がっていくにつれてわずかな右下がり又は法則性なし、中学校においては、明らかな右下がりである。中学校にける進路選択のプレッシャーや、人間関係の悩みがベースにあることは、悩み合計の項目と合わせ見れば明らかである。ただ、小中の段差として、楽しさ度のアップが見られることについては、新しい中学校という世界への子どもたちの期待感の表れであろうか。

ストレス反応については、小学校の方が高いことがわかる。(ストレス反応とは「c1 とても疲れている」「c2 頭痛がする」などの身体にあらわれる反応を得点化したものである。)生理学的な成長過程における要素があるのかもしれないが、悩み合計と比較して見るならば、小学校では、ストレス反応と悩み合計がほぼ同じ変化を見せているのに対し、中学校では学年が上がるごとの悩みの増加に対し、ストレス反応は上昇していない。おそらく、この点が人間関係学科の積み重ねの成果ではないかと思われる。悩みやストレスの増加は、ストレス反応にあらわれることは、これまでの松原七中の効果測定より証明されている。しかし、その変化の幅までは、検証されていなかったのである。小学校と中学校のデータを並べることにより、明らかに変化の幅に違いがあることがわかる。すなわち、長年の人間関係学科の取組

より、松原七中の子どもたちは、しっかりとコーピングしていることを表しているのであろう。

悩み合計については、小学校と中学校の間に明確な段差があることがわかる。子どもたちが思春期をむかえたり、進路選択へのプレッシャーがかかったりと、中学1年から中学3年にかけて上昇傾向になっている。

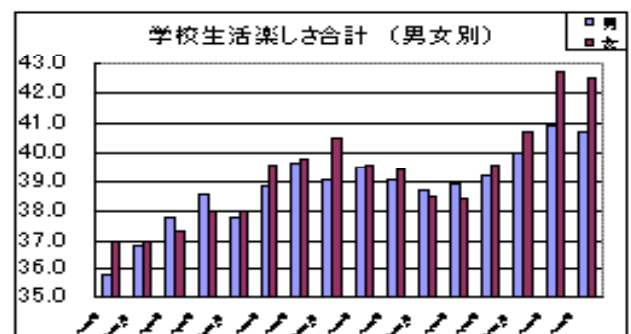
コーピングとはストレス対処のことである。積極的コーピング、攻撃的コーピングの双方において、小学校と中学校の間に段差があることがわかる。積極的コーピングは小学校が高い。積極的コーピングの質問は(「d1 スポーツをする」「d2 友だちと話す」「d3 家族に話す」「d4 先生に話す」-小学校バージョンの質問)の4項目である。そのうち、家族・先生という大人と相談するという項目が4項目中2項目ある。結果から見れば、小学校では「大人に依存している」子どもたちの姿がうかがえる。中学校では「大人離れ-自立」していく姿が見えてくる。次に、攻撃的コーピング(「d5 物にあたる」「d6 人のいやがることを言う」「d7 人をたたく」-小学校バージョンの質問)であるが、明らかに中学校が高いことがわかる。中学校は小学校よりも、子どもの表現のしかたが「厳しい状況」になってしまう傾向にある(つまり、「荒れ」たりする)ことが、この数値から読み取れるのではないだろうか。

今回は、数値の変化からだけの分析であったが、一つひとつの内容の細部まで見ていけば、新たなことがわかってくる可能性は非常に高い。本年度、各校で効果測定のワーキングチームをつくり、集団的な作業でデータ分析を行っている。これからは、一人ひとりが力量を高め、更に新たな課題を発見ができるように取り組んでいきたい。

2) 松原第七中学校

学校生活調査より

a) いじめに関連する項目から見えること



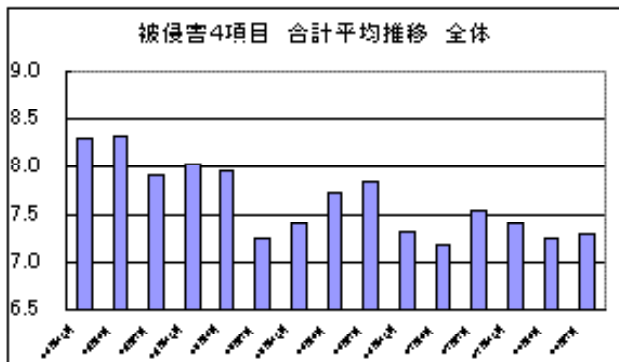
2003年度から2008年度まで、2006

年度の若干の落ち込みはあったものの、楽しさ合計（合計50点）は年々増え続け、調査開始から本年3月までの間、およそ5ポイント以上の上昇を見せている。男女別に分けて見ていっても、本年3月調査が男女ともこれまでの最高値となっており、上昇傾向にあると言える。

その上昇理由の原因は、いくつか考えられる。その中でも、「まわりからの行為」ということでピア・プレッシャーの観点から考えていくことにする。

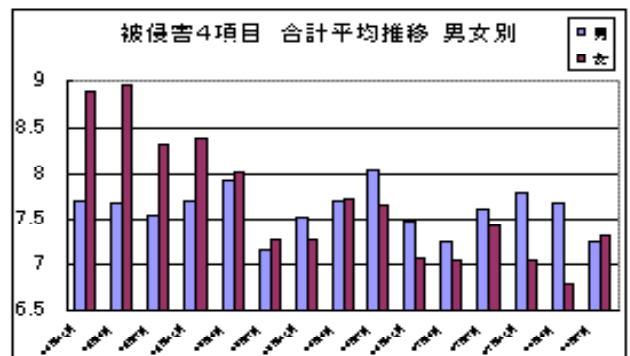
そこで、学校生活調査の中の、

- b4 無視される
- b5 いやなことを言われる（される）
- b6 仲間はずれにされる
- e17 人からの陰口、うわさ話をされること



の4つの項目を拾い出し、合計点（合計21点）を被害得点として、2003年度からの経緯を見ると、本年度まで徐々に減少していることがわかった。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じて、近年では、子どもたちの中で突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深刻な事例には至らずにすんでいる。学校生活調査やふりかえりシートなどのアンケートにより、子どもの変化をいち早くキャッチし、それを教員間の共通認識にまで高め、いじめをする側・される側の双方に、複数の支援を様々な角度から迅速に行ってきた。その結果が、現在の松原七中の現状をつくり出していると言える。また、いじめに関わらず、子どもたちのトラブルや悩みに常にアンテナを張り、必要に応じて適切な支援を供給し、子どもたちとの相談活動を展開している。それに加え、それぞれのアンケート調査によって、子どもたちと教職員とがつながり、様々な問題の抑止力となっているとも言える。そんな人間関係学科を真ん中に据えた学校づくりの成果として、これら4項目における変化があるのではないだろうか。

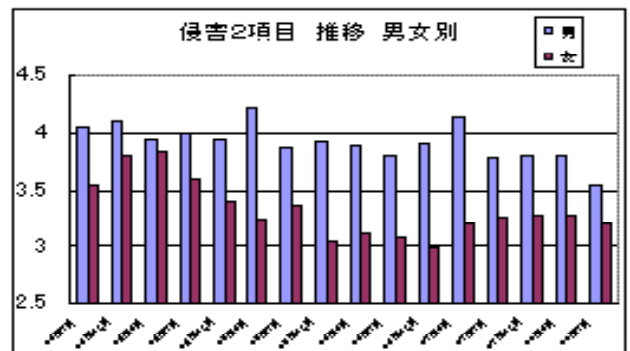
これを男女別のデータに分けてみると、男女別の変化に大きな違いがあることがわかった。2005年を境にして、男子と女子の数値が接近・逆転しているということである。女子は2003年度から、およそ順調に2ポイント減少しているのに対し、男子の変化は最大0.7ポイントの間で上下しているということである。楽しさ度は男女ともほぼ同じような上昇の推移を見せているにもかかわらず、まわりから「侵害される」という観点での得点では、女子には大きな変化があるにも関わらず、男子には目立った変化がないということである。



さらに、「侵害する」という観点で推移を調べていくと、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

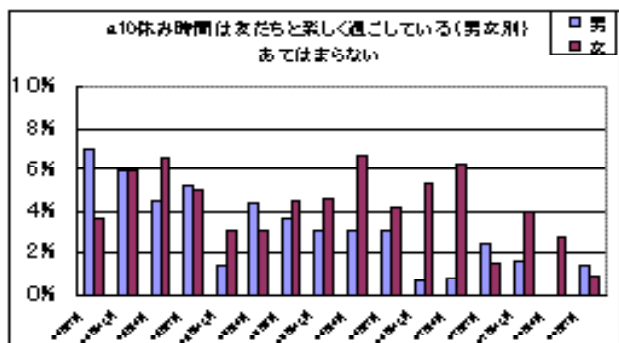
- d6 人が嫌がることを言う
- d7 人をたたく

という項目を合計（合計10点）して、侵害得点と位置づけてみた。するとこれも、女子の減少・横ばいの状況に対して、男子はここ4回の調査では減少傾向が見られるものの、ほぼ横ばい状態であることがわかる。しかも、数値的には常に男子が女子を上回っている。



「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人をたたく」という行為は、「関係性の行為」である。これらの行為は、試し行為などとしても望ましい表現を取ることができない子どもたちの誤った表現方法として、男子の中に根強く存在しているのかもしれない。

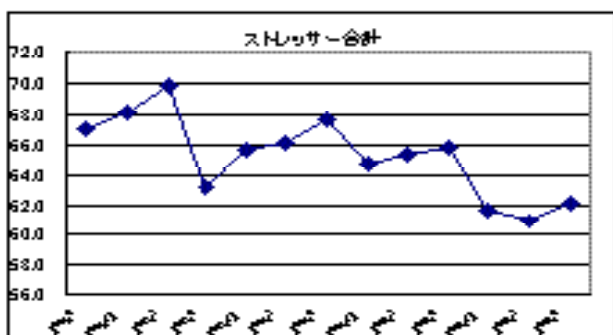
そこで、子どもたちの関係性の積極面を見られるかもしれないということで、「a10 休み時間は友だちと楽しく過ごしている」の項目を調べてみた。その中の「あてはまらない」の回答を見ると、男子においては順調に減少し、本年度3月調査では0%という驚くべき数値が出ている。遊びや会話



を通じた良好な関係性の構築に、いじめに対する有効性を見いだすことができるのかもしれない。一方女子における課題は、女子がつくりがちな閉鎖的な小グループに対してどれだけ風穴を開け、風通しのよい集団にしていくか、ということがあげられる。松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、「わたしのじゃがいも」「さいころトーク」「コロコロトーク」「ルーレットトーク」「すごろくトーク」などの自己開示のプログラムを実施している。その積み重ねが女子の小グループ集団どうしに風穴を開けているのであろう。

いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われていいる。いじめ問題の解決にあたって常に課題となるのが「人の気持ちがわかる」ということである。共感性〔=人の気持ちを想像できる(WHO ライフスキルの解説より)〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

b) ストレス反応とコーピング(対処)



上記の表は、学校生活調査の e の項目であるスト

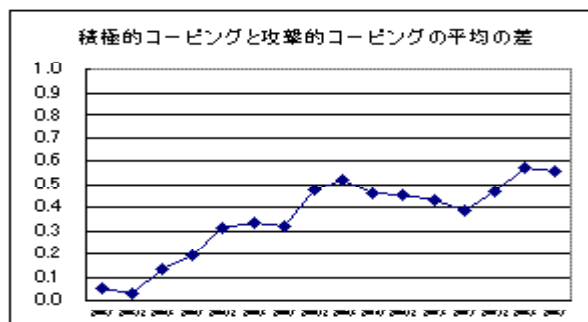
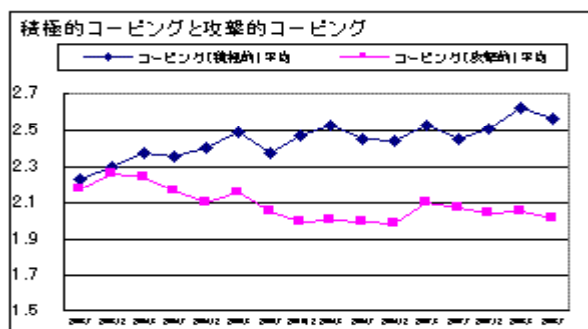
レスの原因となるストレスを測定(24項目合計144点)したものである。(質問:悩んだりイライラしたことがこの一ヶ月間にあったかどうか答えて下さい。例「e1 自分や家族の将来のこと」)学校楽しさ度が増してくると、ストレスの原因となるストレスが減少してくることは容易に理解できる。そして、その最大値から最小値までの差はおよそ9ポイントとなっている。ストレスそのものが減少しているのだから、そこから派生する子どもたちの攻撃的コーピングが減少していくことも当然のことである。人間関係学科等の成果により、子どもどうし、あるいは子どもと教員の関係性が深まり、相談活動が活発化してくる。学校生活調査の中では、このコーピングを「積極的」「攻撃的」「抱え込み」「本能的」の4つの観点で調査をしているが、ここでは「積極的」「攻撃的」の2点に絞って見てみる。項目数が異なるため平均値を算出してグラフに表してみた。(最低値1点、最大値5点)

積極的コーピング

- d1 スポーツで発散する
- d2 友だちに相談する
- d3 家族に相談する
- d4 先生に相談する

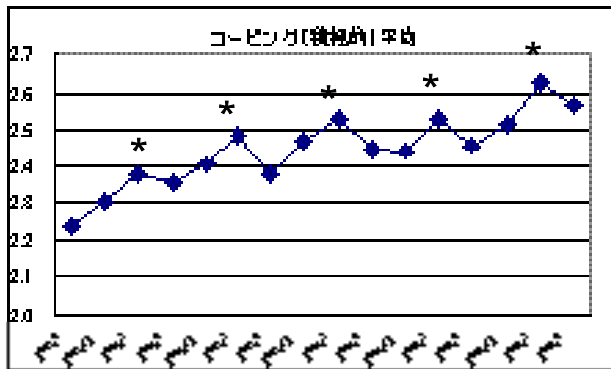
攻撃的コーピング

- d5 モノにあたる
- d6 人が嫌がることを言う
- d7 人をたたく

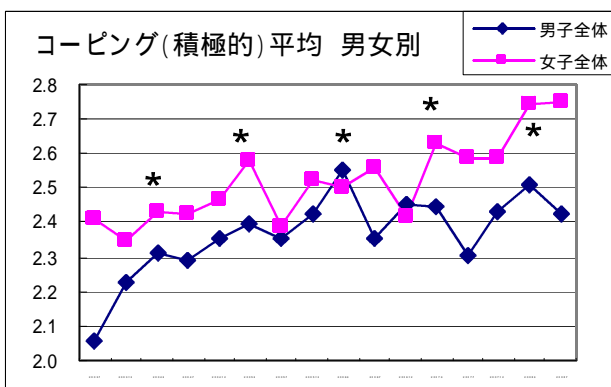


積極的コーピングと攻撃的コーピングの差 (= 積極的 - 攻撃的) としての推移を表したものが前の表である。ほぼ差のない状態からのスタートであったが、現在では、ほぼ0.6ポイントの差となっていることがわかる。5件法での測定であるので、この差は大きいと言える。この差を広げていくことが、いじめ・不登校の未然防止につながっていくことは間違いがない。

さらに、興味深いデータがこの表である。



積極的コーピングの推移だけを取り出したものである。*印をつけた時点まで上昇し、*の次の時点で下降し、また同じパターンで上昇している。そして、*印はすべて3月調査であるという事実がある。学校生活調査は年3回、各学期末に実施をしている。実施月は7月・12月・3月である。新学年になると7月から3月まで上昇し、次の新しい学年になった7月で下降する。つまり、卒業した3年生の代わりに1年生が入ってくる、あるいはクラス替えがあり新しいクラスになると数値が下がるということである。



念のために、男女別のグラフにしてみた。若干同じ傾向はあるように見えるが、同じ法則性が見えるとまでは言えない。すなわち、男女に関係なくクラス・学年・学校という集団のくくりで言うところ、集団として一年周期で学びを上げてきているということが言えるのではないだろうか。子ども・教員ともども、スキルアップを重ねている状況が、階段状に上昇しているグラフから読み取るこ

とができる。年度毎に上昇しているのは、子どものスキルアップであり、階段状に上昇しているのは教員のスキルアップや校区連携の成果であろう。クラスや学年の子ども集団をベースにして、一年間の人間関係学科等での学びの成果としてあらわれていることを如実に表している。

c) ボランティア活動との関連性

「研究開発の内容」の項で述べたように、本年度から子どもたちの社会的有用感を高めていくために、生徒会がボランティアの取組を用意し、子どもたちに参加を訴えた。ボランティアへの参加を「生徒会がんばり手帳」にスタンプを押すというやり方で、本人もまわりも確認できるようにしている。(もちろん「手帳があるからボランティアに参加するんじゃないありません。」とちゃんと原則論を言える子どももいるが)これをデータ化し、学校生活調査の様々な項目との相関を見た。すると、ボランティアに参加している子どもについて次の相関が示された。

学校生活楽しさ度との関連

- a 学校生活楽しさ合計 [+]
- a2 楽しい授業がある [+]
- a3 よくわかる授業がある [+]
- a8 楽しくておもしろい先生がいる [+]

いじめとの関連

- d ストレス対処(攻撃的)[-]
- d7 人を叩く[-]

不登校との関連

- c1 とても疲れている[-]
- d10 学校を休む[-]

自己肯定感との関連

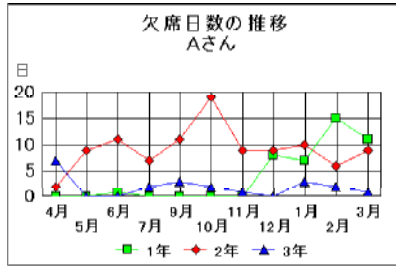
- f4 私は、あまり悩まずに決心することができます[-]

以上9項目である。データの蓄積不足や相関係数の低さが気になるところであるが、大いに参考になるところである。学校生活楽しさ度との関連では、教員との関係性が+である。子どもどうしの関連性との相関が出なかったという結果には少々驚きを感じた。いじめ・不登校との関連で、「攻撃的コーピング」と「d10 学校を休む」という項目に関連性が見られたことは、ボランティア活動といじめ・不登校が無関係で無いことを表している。ボランティア活動がいじめ・不登校の未然防止につながるといった仮説設定が証明される可能性が出てきたということである。今後、ボランティ

アの参加機会を更に設け、子どもたちの変化を追っていきたい。さらに、興味が持てるのは自己肯定感との関連である。「私は決心するには悩んでしまう」と-の相関があるということである。要するにボランティア活動というものが、「決断できない事が悩ましい子どもたち」にとって、ボランティアに参加をする決断でもって、自己有用感を得る機会になっているのではないだろうか。ボランティアはそんな子どもたちが結構気軽に越えることができるハードルなのかもしれない。

不登校からの復帰

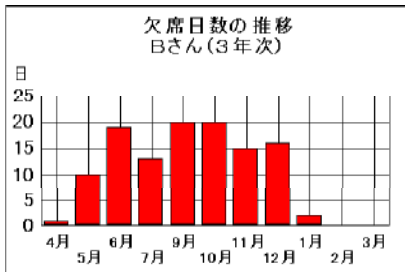
生徒A（現高校2年）



具体的事例は非掲載にしております

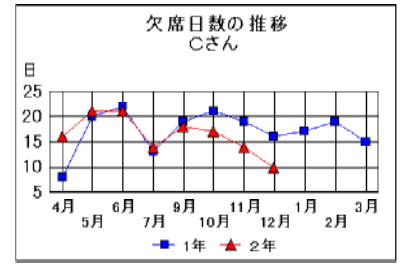
具体的事例は非掲載にしております

生徒B（現高校2年）

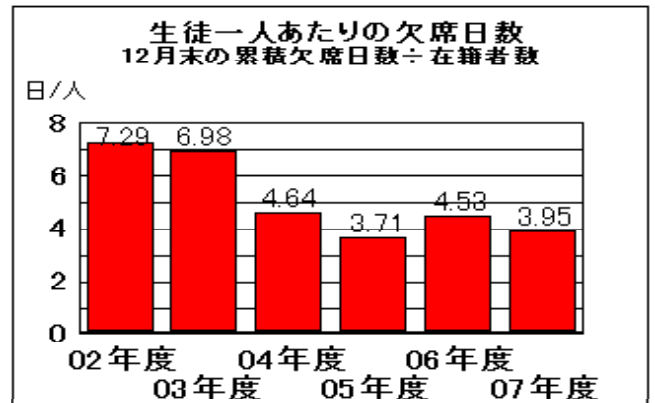


具体的事例は非掲載にしております

生徒C（現3年）

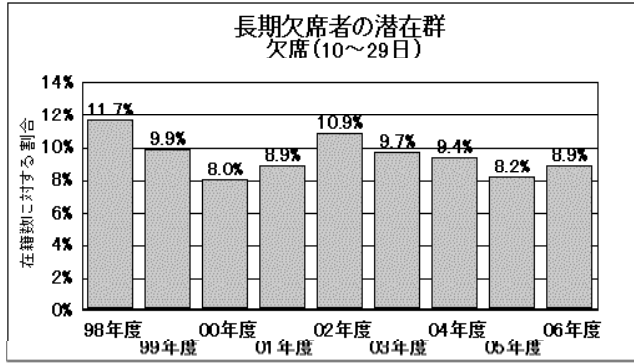


欠席の減少と登校回避感情

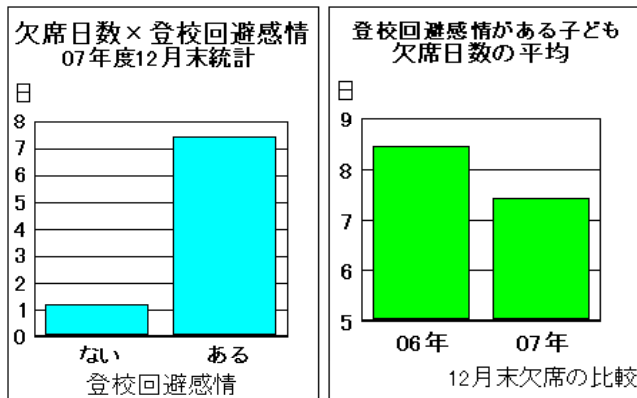


学校全体として、「d10 学校を休む」子どもが減少してきた。各年度の12月末の欠席日数の平均値を比較すると、上の表のようになる。また、

年間30日未満であるが、10日～29日欠席する子どもは、全体の8%台に減ってきている。



7月と12月の学校生活調査で、イライラしたとき「d10 学校を休む」という質問に「あてはまる、どちらでもない」と回答した子どもの群を「登校回避感情がある」として欠席と遅刻を比較した。全体の約20%の子どもが7月と12月の学校生活調査のいずれかの調査で登校回避感情を示している。「登校回避感情がある」群の子どもは、実際に欠席するという行動を起こすことが分かる。



登校回避感情

		12月調査		
		ない	ある	合計
7月	ない	206	21	227
	ある	17	6	23
	合計	223	27	250

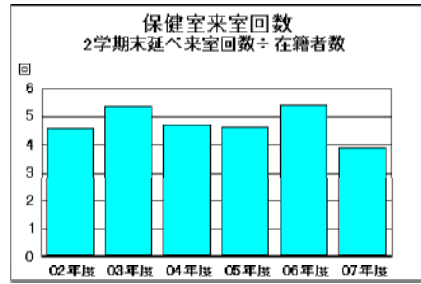
保健室来室者の減少

本校では、「保健室は人間関係づくりが苦手な子どもを受容しエンパワーする場所として、大切な役割を持っている」と考えている。

その視点から、保健室への来室状況を同時期で見ると、過去6年間で最も低い数値を示している。言い換えれば、学校全体として「元気」な子どもが増えていると考えることができる。

しかし、一方で延べ30回以上来室している子どもがいる。不登校生等支援会議や生徒指導部会

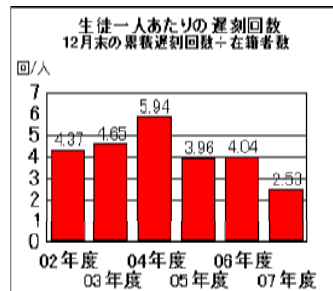
で、毎月の保健室来室状況を養護教諭が報告して



いる。その状況を、学年に知らせ子どもの日々の様子を把握する体制が取られている。

遅刻の減少

「遅刻」の集計を毎月行っている。これは、子ども支援コーディネーターが、各学級担任に出席管理シート(表計算ソフト)を配布し、集計した結果を生指部会・職員会議で共有している。もちろん、実数だけでなく具体的な子どもの数値を示している。過去においては、大幅遅刻をする子どもも若干あったが、本年度は5分程度の遅刻になっている。



各学年では、朝の学活で連絡のないまま登校していない子どもの家庭に、副担任が必ず電話をかけて、状況を把握している。

「教室に子どもがいない」ということに対して機敏に対応することが日常的になっている。子どもは、「教室にいないことは、先生が心配するんだ」ということを意識する。一人ひとりの子どもに、自分ではなくてはならない存在なのだという気づきを促す教師の活動である。

支援体制に見られる成果

研究開発学校2005年の最終報告書でも記述したが、不登校生を担任まかせにしない。これが本校の不登校生支援の大前提である。複数のパイプをつくり、保護者とのつながりをきずき、不登校生を支援するネットワークをつくろうと取組を進めてきた。

- 2003年度から連携した機関は、
 - 富田林子ども家庭センター
 - 富田林少年サポートセンター 育成支援室
 - 医療機関
 - 松原市子育て支援課 松原市障害福祉課
 - 松原市不登校児童生徒総合支援会議
 - 松原市教育支援センター
 - 松原警察少年係 自立支援施設
- などである。もちろん校区の小学校との連携は、

不登校にかかわる会議をもつなど、さらに一步前進した。また、必要ならば小学校の教員の参加を得たケース会議や近隣中学校との生徒指導連絡会を開いた。

学校だけでは解決できない不登校の課題を、さまざまな機関と連携し、子どもを中心としたネットワークができつつあることで、不登校への支援も進んできている。

その結果、不登校生だけでなく、欠席がちな子どもたちやメンタルサポートが必要な子どもたちに対する支援についても教員の意識が高まり、不登校率が減少するという成果につながってきた。

25期生(現1年生)について

毎年、入学前の3月に学校生活アンケートを実施しているが、その中のそれぞれの項目(学校生活楽しさ度・悩み・ストレス反応・自己肯定感)の相関関係を分析した。それが、次の表である。

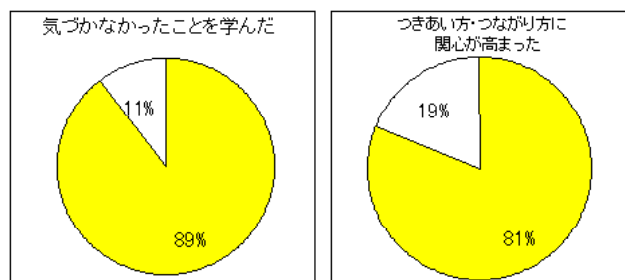
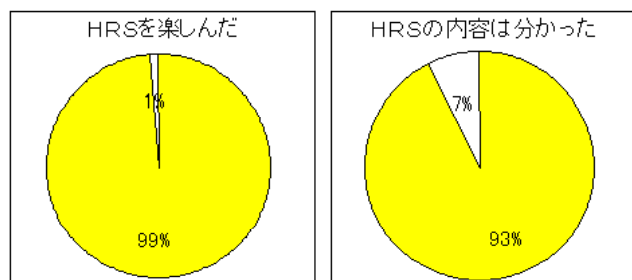
Pearsonの相関係数

	学校生活 楽しさ度	悩み	ストレス 反応	自己 肯定感
学校生活 楽しさ度		-0.627(**)	-0.350(**)	0.473(**)
悩み			0.659(**)	-0.654(**)
ストレス反応				-0.623(**)
自己 肯定感				

(** 相関係数は1%水準で有意(両側)です。)

どの関係も強い相関関係にあり、子どもたちが「学校生活を楽しい」と感じるものの有用性を読み取ることができる。そこで、1年生1学期のHRSでの取組においては、“楽しめる時間になること”を第一に心がけ、ワークの実施を行った。

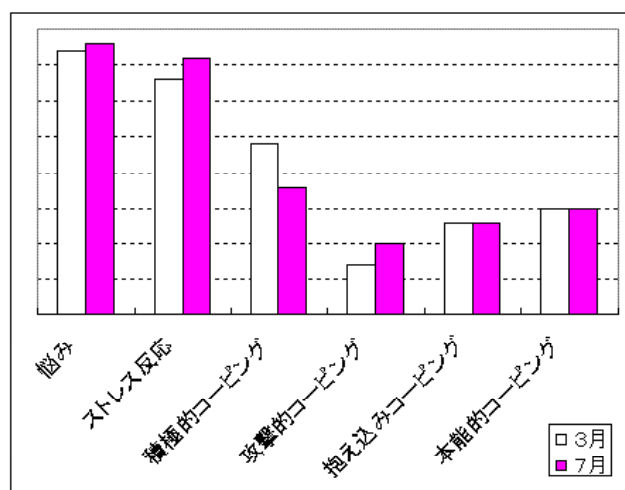
その結果が次のグラフである(1学期末のHRS自己評価より)。



HRSについて「楽しんだ」と感じた子どもたちがほとんどを占める結果となった。

また、「内容は分かった」、「気づかなかったことを学んだ」、「人とのつきあい方・つながり方に興味が高まった」という項目も高い数値を示している。今年度の1年生は、小学校の頃から『あいあいタイム』に取り組んできた初めての学年である。HRSが、『あいあいタイム』で培ったきた“学び”を深め、さらに自分の考えを広げる機会となっていることがうかがえる。

特に人気の高かったワークは、グループワークで、仲間の新たな発見があるものであった。



上のグラフは、3月学校生活アンケートと7月学校生活調査のアンケート項目を比べたものである。

入学前と入学後を比べることで、最上級生であった小学校から、最下級生である中学校への入学には“段差”があることが見て取れる。2つの小学校から集まる子どもたちと、転校生からなる新しい人間関係、そして教科学習、クラブ活動など、さまざまな要因の中で、子どもたちは“戸惑い”を持っていることは確かである。

例年、1年生の2学期以降も継続的にHRSなどに取り組むことで、徐々にではあるが、良好な結果を得てきた。今年度も、ストレスの対処の仕方など、子どもたちの現状に合わせて継続的に取り組んでいきたい。

- ・「サイコロトークング」で、自分のことを班の人に分かってもらえてうれしかった。
- ・「流れ星」でやったように、考えて行動することは、自分の生活に深く関わっていた。
- ・「何でもキャッチ」で相手に気持ちを伝えるのがとても大切だとわかった。
- ・「こんなときどうする？」で、自分の思った事をすぐに言わず、考えてから言おうと思った。
- ・「アニメの村」で、みんなで協力してできて、協力って大切だな～と思った。
- ・「新聞大作戦」で、班で協力して探したりするのがめっちゃ楽しかった。

24期生(現2年生)について

2年生は、昨年度行った学校生活調査でも分かるように、1年生の頃から「学校に来るのが楽しい」など『学校生活楽しさ度』が非常に高い学年であった。例年減少するそれが、本年度どのように推移していくかについて留意して進めたい。

今年度1学期は、仲間との関係をつくっていくワークやコミュニケーションスキルの向上に重点をおいたワークを中心に実施した。

a) 今年度2年生で実施したワークの振り返り

学年・クラスのスタート

～私のCM・わたしのピーマン～

- ・緊張したけど、みんなに自分の思っていることを伝えられて気持ちよかった。
- ・みんなが真剣に聞いてくれて嬉しかった。
- ・みんなのこともっと知りたいなと思った。
- ・みんなピーマンになりきっていて、こんな子なんや～って個性が分かって楽しかった。

コミュニケーションスキル

～ソーシャルスキルアンケート～

- ・今の自分のスキルの状態が分かってよかった。
- 3年生で卒業するときにはもっと上げられるようにしたい。
- ・配慮のスキルが低かった。確かに自分は相手の事を考えられていないところがあったなと振り返ることができた。

～見るスキル on the desk～

- ・「見る」って言っても色々な見方があって、今まで自分では見ているようで見ていないことがたくさんあったのではないかなと思った。

～聞くスキル 伝達ゲーム～

- ・相手の顔や反応が無いところで伝えるのはすごく「伝わっているのかな」と不安になった。
- ・顔を見合わせて、お互いに聞きたいことを聞いて

てゲームをしたら、伝えたいことがちゃんと伝わった。

～すごろくトークング～

- ・めっちゃ楽しかった。すごろくトークングは楽しみながら班の子の事を知ることができるからまたしたい。
- ・班の子の色々な事を聞けたし、自分も1年生の時には言えなかったとも言えるようになって嬉しかった。

～アサーショントレーニング

「アイウエオロールプレイ」～

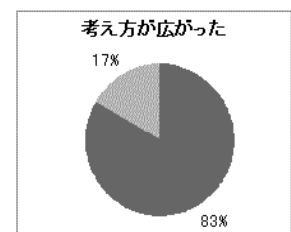
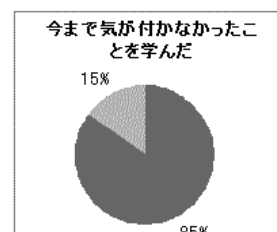
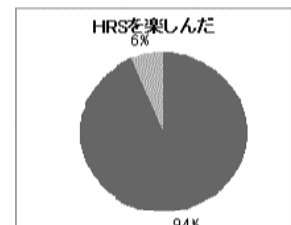
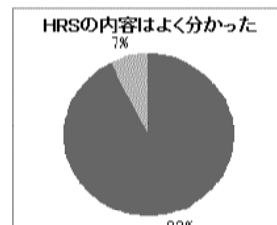
- ・「あいうえお」しか言ってないのに、どんな感情なのか顔を見たらよく分かった。
- ・謝っている「あいうえお」でも「絶対悪いと思っただろうな」と思うものもあった。

～アサーショントレーニング

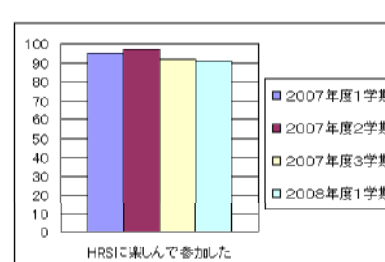
「もめごとだって解決できるさ」～

- ・アサーションは難しいけど、普段使えるようにしたい。
- ・今日やったことは、僕たちの普段の生活でもうたくさんあったことだと思うから、絶対アサーションは必要だと思った。

b) HRS自己評価から見る振り返りの結果

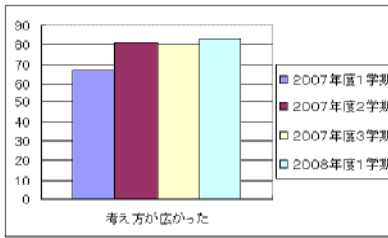


HRS自己評価から分かるように、HRSを楽しく、内容がよく分かり、考え方を広げることのできる教科だと感じている子どもたちの割合が高い結果になった。



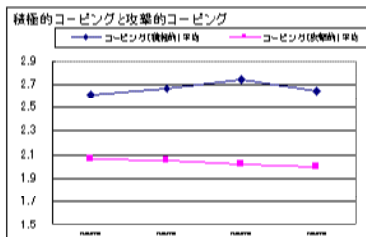
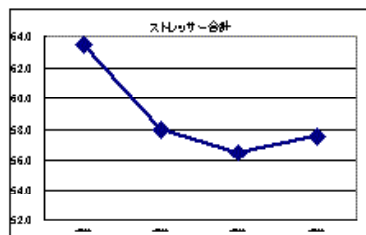
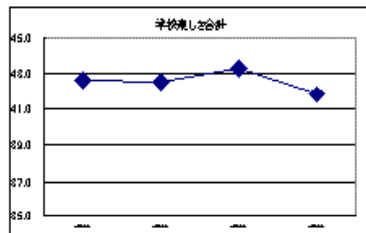
1年生の1学期から比較しても減少する結果にならなかったのは、1学

期に実施したスタートプログラム等の成果ではないかと考える。また、コミュニケーションスキルを高めていくワークでは、子どもたちの人気も高く、「おもしろく、自分たちの役に立った」と感じている子どもたちが多かった。



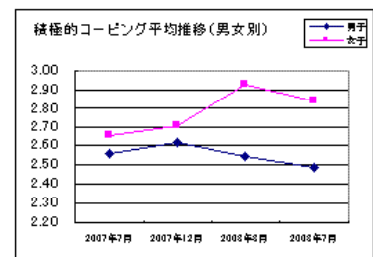
c) 学校生活調査から見た子どもたちの変化

「学校生活楽しさ度」の推移を見てみると、若



干の減少があった。それは、ストレス反応の若干の増加と関連があると思われる。中学校2年という学年になったことでのまわりの変化、思春期の始まり、進路選択への意識の芽生えなどが考えられるのではないだろうか。ストレス反

応については、昨年7月調査から12月調査にかけて大幅な減少が見られた。ストレスに

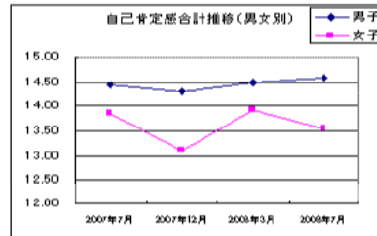
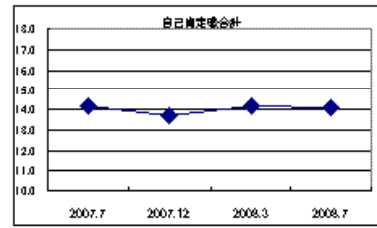


に対するコーピングの方法で、変化が出つつあるのは、1年生11月から学習しているアサーショントレーニングの成果として、子どもたちの中に、ストレスに対するコーピングの変化があらわれてきているということではないだろうか。積極的コーピングの男女別では、特に、女子におけるコーピングの変化は大きい。男子では、攻撃的コーピングをとる傾向の強かった子どものケンカ・トラブルが減少したという実感がある。

d) 今後の課題

ストレス反応によるストレスへの対処法の変化

は現状が分かってきたが、自己肯定感については



変化がなかなか出てこない。ほぼ、横ばいの状態が続いている。特に、男女では、男子に比べ女子のそれが低い。また、過去の研究から自己肯定感と社会的有用感が大きく関係していることを確認してきたことか

ら、自己肯定感と社会的有用感を高められるだろうボランティアとの相関を調べてみた。ボランティアに参加している子どもたちの自己肯定感「私は自分自身をあまり信用していません」という項目でいくつかの相関が見られた。2年生では、地域教育協議会主催のボランティアを始め、職場体験学習や、校区研究開発を通じて、「自分は褒められる、役に立つ存在なのだ」と思えるような取組とHRSの学習をリンクさせながら進めていきたい。

23期生(現3年生)について

23期生は、学年が68名(2クラス)と、小さな集団である。小学校も、恵我南小学校で1クラス、恵我小学校で2クラス(3~4割は松原市立松原第四中学校へ進学)。さらに、男女比が男子40名、女子28名、つまり1クラス20名の男子と14名の女子、という非常にアンバランスな構成である。就学時から小集団で過ごし、クラス替えによる組み直しが少なかった23期生の変化をみていく。

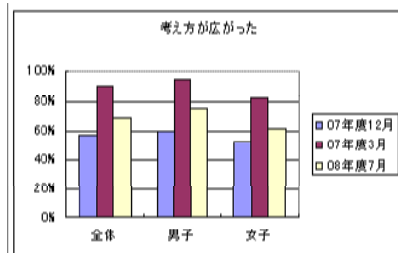
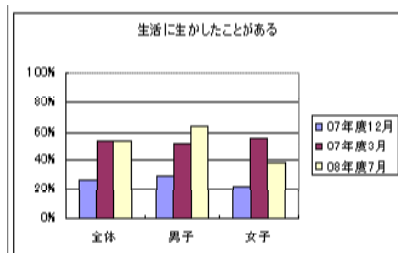
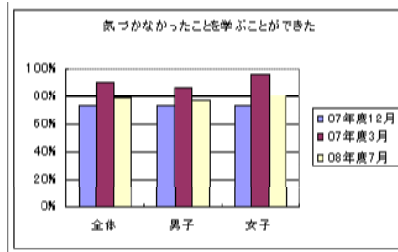
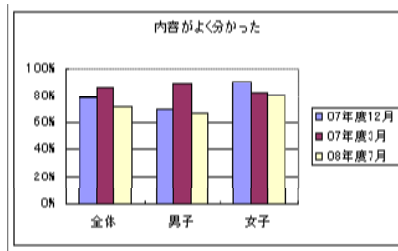
a) 子どもたちの「ふりかえりシート」から

『何にでも意味がある!「名画鑑賞」』

- ・みんなそれぞれ見方が違うんだなあと思った。1つの視点から見るんじゃなくて色々な視点から見ようと思った。
- ・1つの見方を言われるとその見方にとらわれてしまうと感じた。
- ・いやなことがあったときも、視点を変えてみたい。ポジティブでいいなと思った。『仲間と協力!「トラスト・アクション」』
- ・相手を信じてな、でけへんなあーと思った。でも、女子全員でトラストアップやって、失敗ぎみやったけど楽しかった。

- ・あまりしゃべったことがない子といっしょにや
ってよかった。
- ・トラストアップは相手に遠慮せずに体重をかけ
合うのが難しかった。トラストフォールは、相
手を信用して倒れたのであまり怖くなかった。
- ・最初こわかったけど、やっていくとちゃんと受
け止めてくれると分かってきて、信頼できてち
ゃんとできた。
『修学旅行で・・・「こんな時、どうする？」』
- ・みんなのロールプレイがおもしろかった！
- ・分かったことは、目と目を合わせて話したほう
が、気持ちが伝わるということ。
- ・ちゃんと言葉をかけることは大事なだとわか
った。
- ・ロールプレイを見て、相手からしたらいつも自
分のやっていることはいやなんだと思った。
- ・礼儀正しくしたほうがトラブルが起こりにくい
し、礼儀正しい方が気持ちいい。
- ・やっぱりどういう風にあやまったりするかによ
って、相手の気持ちが変わるんだなあと思った。
『あなたと私を分ける「線」』
- ・プライベートはみんなにある。
- ・自分もちゃんとした境界をつくらなと思った。
- ・今まで、自分が嫌だと思っても、口に出すこと
ができなかつたりした。それを伝えることも大
事と分かった。逆に、自分が許せるものでも他
の人からしたら嫌に感じることもある。気をつ
けないといけない。
- ・自己中はあかなあ・・・
- ・友だちに机の中をさわられたり、友だち自身は
たいしたことだと思っていないけど、自分はす
ごくいやだった。
- ・相手の都合を考えず長電話したり、ノートを勝
手に見たりした。これからは気をつける。
『職業調査にむけて！「アポの取り方」』
- ・言い方などで、相手の気持ちが良くなったり悪
くなったりする。
- ・言葉づかいを気をつけないとあかんと思った。
言う内容をちゃんとまとめておこうと思った。
- ・敬語を使って、自分が何の目的で行くのかをし
っかり言えるように頑張りたい。
- ・言いたいことを一方的に言うんじゃないと思っ
た。不安やった電話の方法が分かって良かった。

b) アンケートから



左のグラフは、毎学期末に実施している『人間関係学科自己評価』の変化である。すべてにおいて、2007年度（2年生）の3月の値が高く、これを契機に下降はしているが全体として上昇していることが見て取れる。

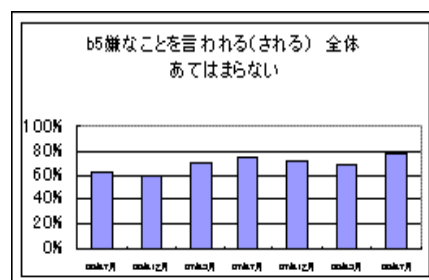
スキー合宿前後のHRSとむすんだ取組が功を奏したのだと言える。23期生は、全体としては落ち着いているものの、仲間関係にストレスを抱えた子どもの多い学年である。それが、

スキー合宿のクラスミーティングに向けての取組、そして終わってからのグループワークを終えて、学年（クラス）の雰囲気があたたかくなったからだろう。自己開示や効果的コミュニケーションのワークが功を奏したと思われる。

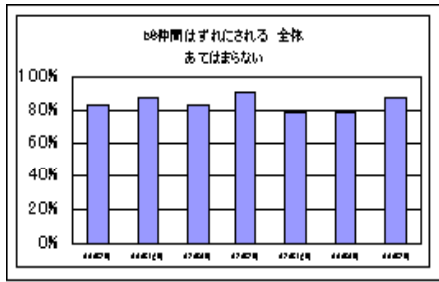
また、攻撃的な層と、我慢してストレスをためる層に分かれていた男子の解答で、「生活に生かした」が多くなっているのが成果だと言える。

c) 学校生活調査からみえる子どもたちの変化

[1] 学年の被侵害率の低下



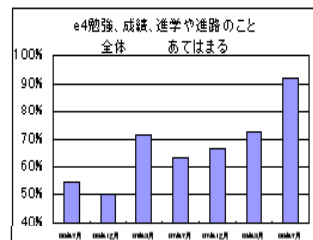
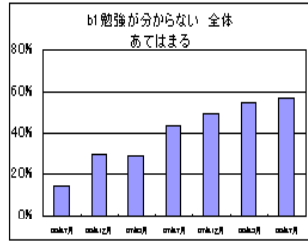
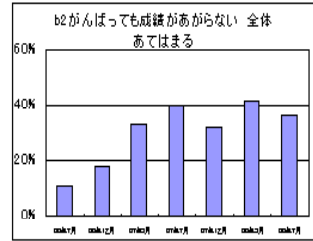
23期生は、2年生の2学期、仲間関係が悪くなった時期があった。いくつトラ



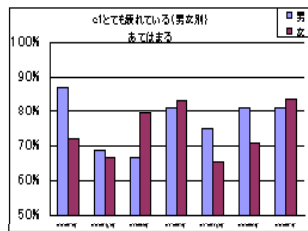
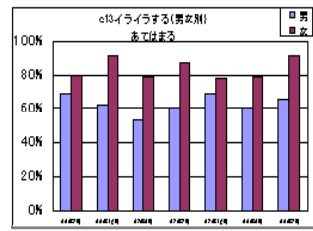
ブルが発生し、懇談や指導をもったことも多かった。しかし、b)の変化にも現れていたように、

スキー合宿前後の取組を経て、子どもたちの精神的な成長とともに、関係が良くなってきていると言えるのではないかと。

[2] ストレッサーの増加とコーピングの男女差

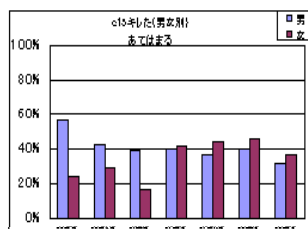
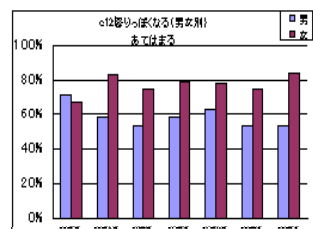
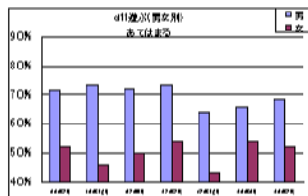
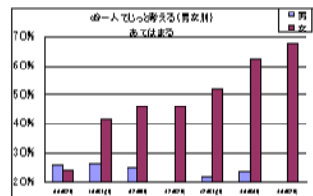


ここに挙げたグラフは、進路に関するストレスの変化である。年を重ねるにつれ、数値が上昇している。また、イライラ・疲れて

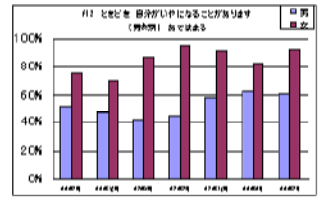
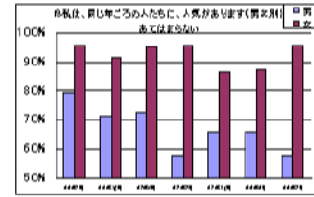


いるなどの、ストレス反応も高い(とくに女子)。

だが、男子のストレス反応の変化をみると、「c12 怒りっぽくなる」「c15 キレた」などの攻撃的な対処につながる反応が下降しており、逆に、女子のそれが上昇傾向である。ストレスの対処の仕方も、「d9 一人でじっと考える」女子と、「d11 遊ぶ」男子という構図が見て取れる。

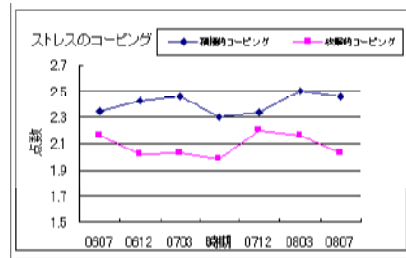


ほかに女子のストレスのコーピングとしては、「d11寝る」(71%)「d13食べる」(55%)「d8がまんする」(52%)「d14泣く」(47%)など、自分で解決しようと苦しんでいるように見える。



その原因として、上のグラフからも分かるように、女子の自他の関係性に自信がないことがあげられる。「d2友達に相談する」は58%と、やや低めである。とくに女子に対して、自分や他者への信頼につながる取組が課題であると言える。

[3] 今後の課題



学年全体の変化を、複数の関連項目から総合的に見ると、以下ようになる。積極的コーピング(d1~d4)は、学年が変わるごとに一度下降し、学年が進むごとに増えていく。攻撃的コーピング(d5~d7)は、2年生2学期一度上昇するもののその後下降している。

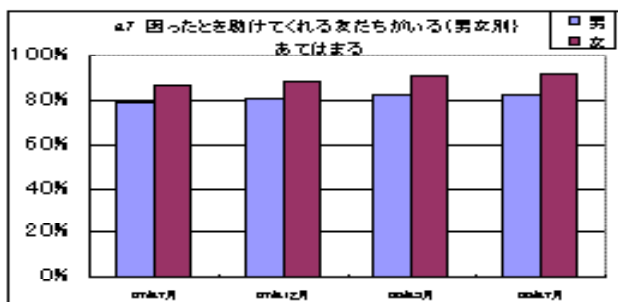
3年生になった今、1学期であるにも関わらず攻撃的コーピングが低く積極的コーピングの値が高い。男子の数値が好転していることが大きいと思われるが、今後、特に女子のストレス反応とコーピングの実態を把握し、支援につなげていくことが課題となる。

また、子どもを個別に見たとき、「学校が楽しくない」と答えた子どもが、攻撃的コーピングに出る、悩みを多く抱える、自己肯定感が低いなどの強い関連をもつことが分かっているので(2005年度報告書より)、それぞれの実態に合った個別の支援も必要である。

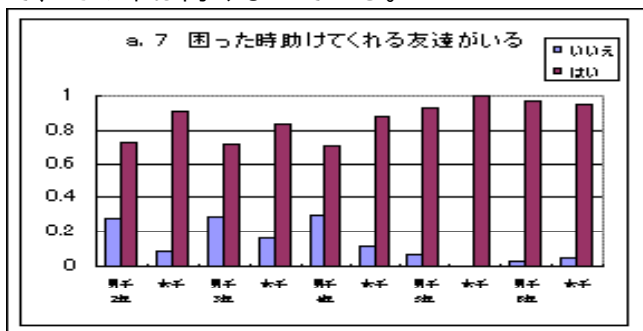
3) 恵我小学校

学校生活アンケートから

a) 子どもどうしの関係

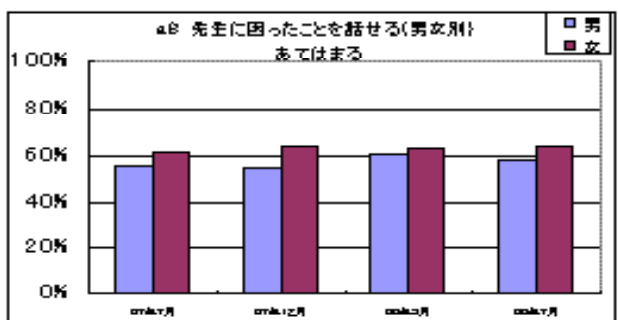


上のグラフは「a7困ったときに助けてくれる友だちがいる」と答えた子どもの率の推移を表したグラフである。このグラフを見ると、概ね80%から90%の子どもの率がそう感じていることがわかる。その率の移り変わりを見ても、僅かずつではあるが男女ともに増えてきていることがわかる。また、今年度7月に実施したこの項目での学年別の集計を見ると、高学年になっていくにしたがって、その率は高くなっている。



このことから、「あいあいタイム」をはじめとした取組が浸透し、子どもたちは友だちとの関係がより深化したものになっているという自信を持っている様子が見えてくる。

b) 教師と子どもの関係



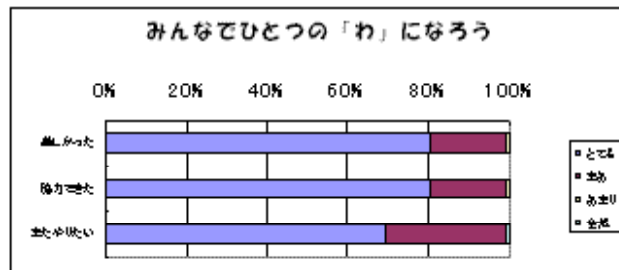
上のグラフは「a8先生に困ったことを話せる」と答えた子どもの率の推移である。

こちらもアンケートの実施ごとに「あてはまる」と答えた子どもの率は増えており、教員と子どもとの関係が良好になってきていることがうかがえる。

。「あいあいタイム」の授業を通して、教員自身が子どもとの接し方の中で、暖かいまなざしで受け入れていくこと、小さな反応も見逃さないように注意を払うこと、そして、子どもの姿に共感をするとする姿勢が浸透していく中での成果がでてきていると考えられる。

「あいあいタイム」の授業を通して

「あいあいタイム」の授業では、1時間の授業の最後に必ず「ふりかえりシート」を書かせている。どの学年も「授業が楽しかった」という質問に対しては、90%近くの子どもたちが「楽しかった」と答えている。6年のグループワーク「みんなでひとつの『わ』になろう」では、「協力できましたか」という質問に80%以上の子どもが協力できていると感じている。



不登校生等支援で名前があがっているBも、前述のように学校生活アンケートでは学校楽しさ度では低いものの、「a5楽しく話ができる友だちがいる」の項目では、それまで「あてはまらない」と答えていたのが今年度は「あてはまる」に好転している。「あいあいタイム」のふりかえりシートでも「さんが『きょうはいい天気だね』と言ったから『うんうん』て、ぼくは言った。『いい天気だね』て話しかけてくれてうれしかったです。」と友だちの名前をあげて、その子との関わりを喜ぶ感想を書くようになった。

低学年の子どもたちにとって「あいあいタイム」はいろいろな子と関わるきっかけになっており、また、友だちについて知る機会にもなっている。中学年の子どもたちについては、友だちとのつながりを考えることのきっかけになっている。高学年では、具体的な場面での「協力」を感じる機会になっている。ふりかえりの感想の中でもそのことにつながる感想がでてくる。今後、ふりかえりシートの項目を検討し、その学びをシェアリングできるような内容にしていきたい。

a) 1年 「話そう伝えよう」

子どもの気づき

[1] 「あいさつりレーでぴったんこ」

- ・あいさつがきもちよくいえた。
- ・あいさつをえがおでいってもらえてうれしかった。

[2]「まほうのマイク」

- ・ちょっとはずかしかったけど、だんだんたのしくなった。
- ・じぶんはあまりできなかつたけど、またやるときはおおきなこえでいいたいです。

[3]「こんなときってなんていう？」

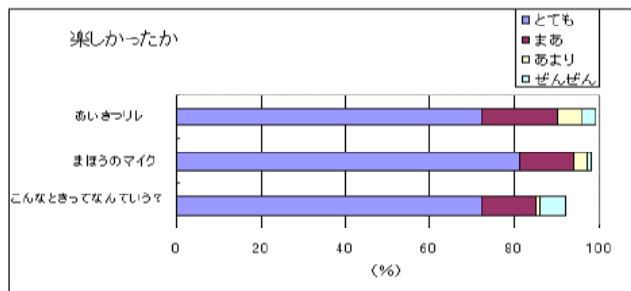
- ・きょうのあいあいいたいむでげんきよく「ありがとう」と「ごめんね」がいえてよかったです。またこんなやりたいです。
- ・おたがい「ごめんね」っていえてよかったです。

「話そう伝えよう」では、最初に場に応じたかん



たんなあいさつをゲームを通して楽しく学び、次に自分の好きなものをみんなの前で伝えるワーク、最後に

場に応じた言葉かけをするトレーニングを行った。どのワークも、『話す』ことに対する気持ちよさを素直に感じとっている子どもたちが多くいたことが感想からわかった。何でも素直に受け止めることができる低学年のうちに、ソーシャルスキルを身につけさせるようなワークに取り組むとよいと考えられる。「まほうのマイク」では、クラスで親しまれているキャラクターを助けるというストーリー性のあるワークに取り組んだ。ふりかえりシートの結果より、同じパッケージの他のワークより『とても楽しい』と感じている割合が高くなっていることがわかった。子どもたちが意欲的にワークに取り組むためには、ストーリー性のある展開や場面設定が効果的であるようだ。



b) 2年「いっしょにあそぼう」

子どもの気づき

[1]「なかまにいらて」

- ・笑顔で言えてよかったです。とてもうれしくて

むっちゃ楽しかったです。またしたいです。友だちと遊ぶとき、仲間に入れてゲームのように話したいです。顔を見て話せてよかったです。

[2]「あいあいキャッチボール」

- ・やさしくボールをなげてくれて、よくとりやすかったです。たのしかったです。

[3]「あいあいバスケット」

- ・わたしはアイスクリームが好きな人って言ったらいっぱい動いてくれてよかったです。その後プールが好きな人って言いたかった。こんどはこれよりいっぱい考えたいです。

構成として、最初に友だちに誘いかけの声をかけるトレーニングを行い、次にグループ単位で言葉を介在してのゲームを楽しんだ。最後に全体で遊ぶ中に自分のことをみんなの前で言うという課題を設定した。最初のワークでは、仲間に入れてということには照れを見せながらも、言ってもらったことへの気持ちよさを感じ取っていた。感想からも実際の場面でも活かしていきたいと感じている子どもたちが多くいることがわかった。「あいあいキャッチボール」では言葉のやり取りよりもむしろキャッチボールに意識がいく子どもも多く、そんな子らは優しく投げたことへのうれしさを



を感じていた。「あいあいバスケット」はわたしメッセージを取り入れ、問題を出して

いったことがよかった。「わたしは です」という内容をたくさん考えさせていたので、そのことをみんなの前で言いたいという気持ちや、同じだという共感性をもちやすかった。子どもたちの感想でも自分の問題でたくさんの人が動いてくれたことをよろこんだり、同じことをよろこんだりするものが多かった。学校生活アンケートでも楽しく話せる友だちがいると答えた子の率が圧倒的に高い。女子については、ほとんどがそう感じており、昨年度末と比べても増えていることにつながっている。

c) 3年 「友だちをキャッチ！」

子どもの気づき

[1]「?をキャッチ！」

- ・自分がいやと思っていた言葉を、みんなほとんどいえたと思います。でも、言葉の中にもい

やな言葉だけじゃなくいい言葉もいっぱいあるということもわかってよかったです。言葉のことが学べました。

[2]「ハートをキャッチ！」

- ・あんまり男の子と女の子に、ありがとうやおめでとうと言ったことがないので、なんかすごくきんちょうしました。ちっちゃい声だったけど、うまく言えてよかったです。またしたいです。

[3]「ハートでつながろう！」

- ・一番さいごにスパイダーネットがかんせいしてよかった。Aくんがうける時にじょうずにうけていた。

普段何気なく使っている言葉が人を傷つけもし、うれしい気持ちにもさせることを感じ取らせ、友だちを受けとめ合うことをねらいとして取り組んだ。「?をキャッチ」では、本物のたわしとハート型の風船を投げ合って、視覚や感覚で「ちくちく言葉」と「ふわふわ言葉」をつかませた。これまで使ってきた該当する言葉が子どもたちから堰を切ったように出てきて驚かされた。二つの言葉が子どもたちの心によく届き、日常的に使える言葉となった。「ハートをキャッチ」では、「ふわふわ言葉」を



言いながらハートの風船をグループで投げ合った。前もって、自分の言われたい言葉を考えてカードに書いたが、その理由も付け足すことで、友だちへの理解が深まった。『いいよ』と書いた子は、「ぼくがしっばいしても、いいよといわれて心にのこるから」と理由を書き、こちらの子も理解にも役立ち、温かな雰囲気クラス全体に広がった。「ハートでつながろう」は、スパイダーネットを作るワークであったが、成功するのにこちらの多大な気遣いが必要であった。子どもの実態に合ったシンプルなワーク開発が課題といえる。苦労してつなげたスパイダーネットのひもを教室に掲示して、これからにつなげていきたい。

d) 4年 「あなたのこと知りたい」

子どもの気づき

[1]「聞き上手になろう！何でもわかってね」

- ・横の人といっぱいしゃべれておもしろいこともいたりして、めちゃくちゃおもしろかった。

- ・あいづちで「今日はいい天気だね」といったら、「そうだね」とやさしくいってくれてうれしかったです。



[2]「聞き方だいじょうぶ？」

- ・3つの聞き方のパターンを比べたら、パターン3がとってもいいことがわかった。

- ・パターン3は、やさしく聞いてあげているから話している人もいい気持ちになるとおもう。

[3]「名たんてい！ダレナン」

- ・わたしは、すいりシートに11人も書いていたのに、8人しかあってなくてくやしかったです。
- ・今日のあいあいタイムは楽しかった。28人も見つけたA君がすごいと思った。

[4]「友だちテレパシー」

- ・Bさんの伝えたいものが、とてもよくわかりました。友だちがいつもけっこう遊んでいる遊びを考えました。
- ・わたしは、すきな動物の問題で「うさぎ」をテレパシーで送っているとわかってくれてうれしかった。



相手の様子や表情に気づき、友だちのことをわかってもらうことをねらいとして取組を進めた。4つのワークを行う中で友

だちのことを再発見し、理解を深めることができた。また、「聞き方だいじょうぶ？」では、初めてロールプレイに挑戦したが、最初は、はずかしがってなかなかうまくできなかった。教員がモデリングとしてロールプレイを見せてから行う方がよかった。「名たんていダレナン」では、情報カードをクラス全員分貼ったので答える時間が少なく、達成感を与えることができなかった。しかし、友だちの情報をしっかりとらえて当てることができた時は、とてもうれしそうだった。「友だちテレパシー」においては、友だちの普段の生活や会話から推察し、ジェスチャーを見て答えることを楽しそうに、また真剣にしていた。ワークを工夫し楽しく繰り返し行う中で、あきることなく友だ

ち理解を深めていくことができた。

e) 5年 「わたし発見！友だち発見！」

子どもの気づき

[1]「ご注文はどっち？」

- ・ ぼくが意見を言うときにみんな、笑うかと思ったら、うなずいてくれたのでうれしかったです。

[2]「本当の気持ちは...？」

- ・ 言いたいことは、言わなければわからない。いずれわかってもらえると思わず、自分から言うことが大切だと思いました。

[3]「ケーキをかざろう！」

- ・ 一人だと、あまりいいようなケーキができなかったけど、班でやってみると、奥深く考えられて、ものすごくいいのができたので、一人より大勢でやった方がいいんだなぁと思いました。

1学期に取り組んだパッケージ「わたし発見！友だち発見！」では、気持ちや考えを伝え合うことの心地良さや大切さを学び取ってほしいと願い、3つのワークに取り組んだ。「ご注文はどっち？」では、簡単な二者択一の問題を与え、自分ならどちらを選ぶか、理由もつけて自分の考えを主張する活動に取り組んだ。ゲーム感覚で取り組んだので、にぎやかな時間となった。友だちがどちらを選ぶかにも関心を持って聞き合い、「やっぱりな！」「うそー！予想外！」などと言い合いながら楽しんでいた。「本当の気持ちは...？」は、学年の教員が劇をするという形をとったので、子ども達は大変喜んでいて、よくありそうなもめごとを取り上げ、自分の気持ちを伝えることと、相手の気持ちを汲み取ることの大切さを伝えた。「自分は に似てるからこれからは～したい」と自分に返す子どもも多かった。1学期に取り組んだ中で、最も楽しさ度の高いワークであった。「ケ



ーキをかざろう！」は、パッケージのまとめとして、班の中で自己主張し、ケーキのかざりを考えるという活動を設定した。自己主張はよくできていたが、様々な意見をまとめることに慣れていなかったために、とまどう班も見受けられた。話し合いのスキルが不十分だったために楽しさ度も低いワークとなってしまったが、自分の考えを主張する、という点では教師の願い

は伝わっていたように感じられる時間であった。

f) 6年「みんなでひとつの『わ』になろう」

子どもの気づき

[1]「ドン！で『わ』になれ」

- ・ みんなで協力したりすることはとても大切だと思いました。

[2]「新聞紙、もとももどった『わ』！」

- ・ 班で声をかけ合ってがんばった。むりと思ったことができて、すごくうれしかった。

[3]「パズルでGO！」

- ・ ちょっと難しかったけど、みんな意見を言ってできてよかった。早く終わった人がまだできていないところに行っていっしょに考えていたので早く終わったんだと思う。

[4]「みんなでひとつの『わ』になろう」

- ・ 最後にみんなで「わ」を持った時、クラスのみんなとつながっているみたいですごく楽しかったです。

パッケージ全体を通して、みんなで協力して何かを成し遂げることで達成感を味わわせることをねらいとした。「ドン！で『わ』になれ」は、どこに自分が行けばいいのが困っていた子に声をかけたり、身振り手振りで合図を送って教えたりするなど助け合う姿が見られた。「新聞紙、もとももどった『わ』！」は、役割分担をしたり、お互いに声をかけ合ったりすることで仲間どうして協力することができた。「パズルでGO！」は、エクササイズの内容が子どもにとって難しく、パズ



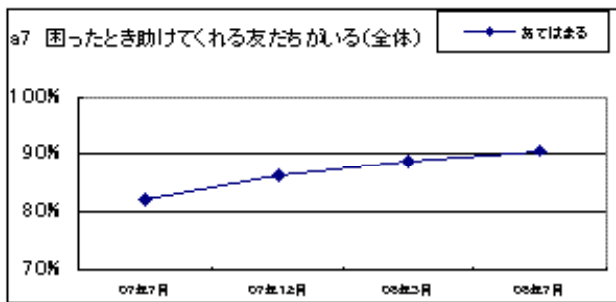
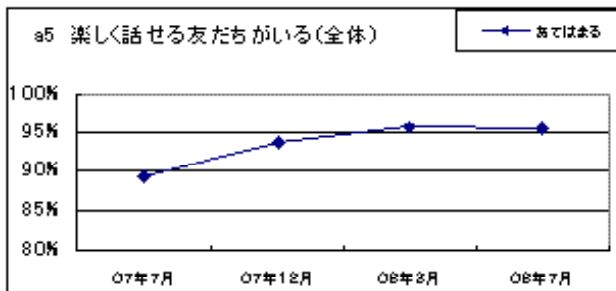
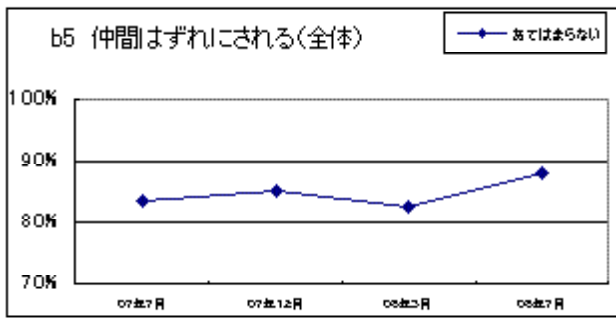
ルがうまくできなくて楽しめず、他のワークに比べ達成感が感じられにくくなってしまった。「みんなで

ひとつの『わ』になろう」は、ルールが複雑であったが、場の設定や音響等で雰囲気盛り上げたため、子どもたちが意欲的に取り組んでいた。今まで知らなかった友達の良さを見つけて、自主的に活動できる力を身につけさせることを願いワークに取り組んできた。こうした子どもたちの様子や感想から、活動の中で友達の良さや協力することの大切さを感じ取っていたことが分かった。

4) 恵我南小学校

学校生活アンケートより

a) 子どもどうしの関係

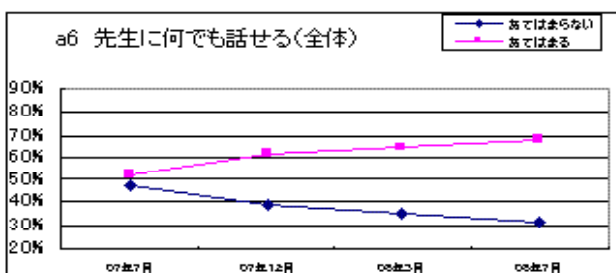


「b5 なかまはずれにされる」という項目では、2007年7月から少しずつ減少傾向にある。

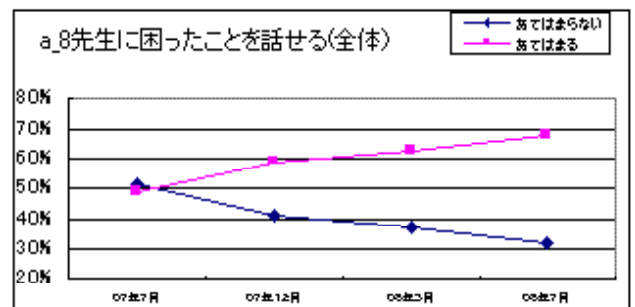
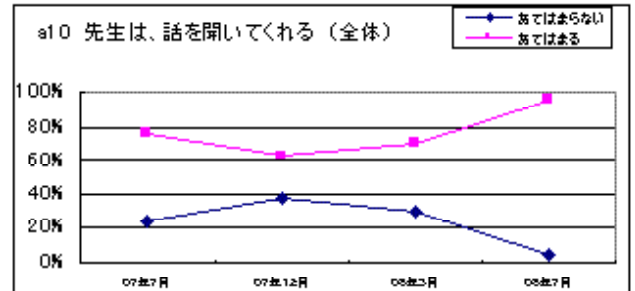
また、「a5 楽しく話せる友だちがいる」、「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」という項目で「あてはまる」と答えた子どもは、それぞれ95%、90%に達していて、大きく改善してきている。

3つのグラフから子どもどうしの関係は良い方向に向かっていることがうかがえる。しかし、少数ではあるが、仲間関係がうまくいっていないと答えた子どももあり、引き続き、彼らに目を向け、人間関係を深める取組を進める必要がある。

b) 教師と子どもの関係

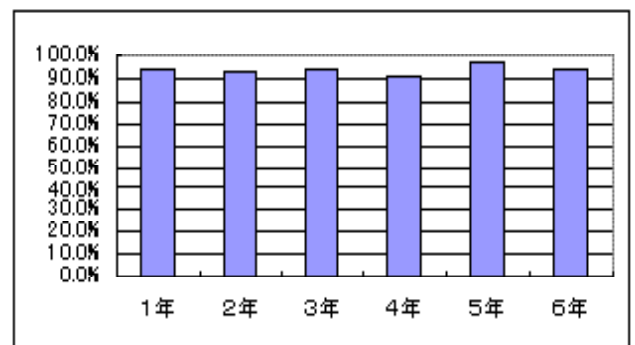


「a6 先生に何でも話せる」「a8 先生に困ったことを話せる」と答えた子どもは増加の傾向にあり、今年の7月の結果では、70%に迫ってきている。また、「a10 先生は話を聞いてくれる」という項目では100%近い子どもが「あてはまる」と答えている。



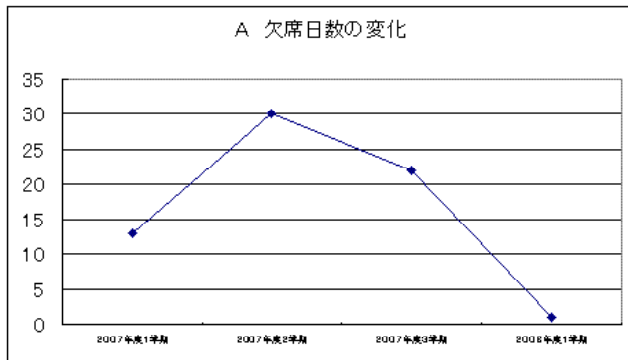
あいあいタイムを通して、教員が子どもへの関わり方を学び、教員と子どもの関係が近づいていることが分かる。

「あいあいタイム」の授業を通して



上のグラフは、1学期の各学年のあいあいタイムの全授業で使った「ふりかえりシート」の「今日の授業は楽しかったですか」という質問に対して、「楽しかった」と答えた子どもの率の平均値である。全ての学年で、90%を越えている。このように、子どもたちは「あいあいタイム」を毎回大変楽しみにしており、意欲的に取り組んでいることがわかる。

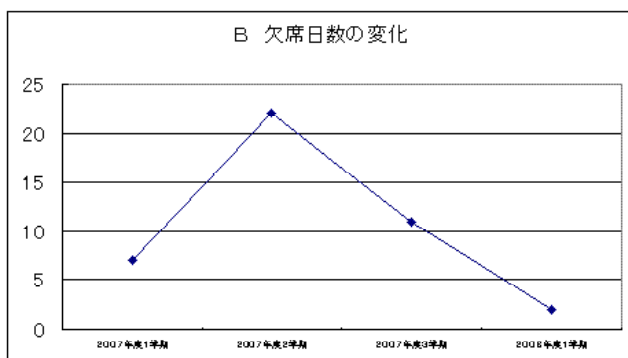
長期欠席の子どもの欠席日数の減少
子どもA



Aの母親に精神的な揺れがあり、登校は母親の生活態度や心理状態に大きく左右される。母親の生い立ちから来る様々な思いを受け止める関係づくりと、関係諸機関とのケース会議を定期的実施しながら、改善をめざしてきた。

今年度は特にあいあいタイムをはじめ、Aが楽しく学校に来られる集団づくりと、校内不登校生等支援会議を受けた職員会議等で、母親への支援も含め、教職員全体で共通理解を図りながら、取組を進めてきた。その結果、1学期の時点では欠席日数1日と大きく改善してきている。

子どもB



友だち関係の安定と「学校に行っても大丈夫」という自信が欠席数の減少につながっていると考えられる。

このように、あいあいタイムや学年・学級活動を通して、教師が子どもの変化や様子に敏感になり、校内不登校生等支援会議などで、全教職員の共通認識のもと、意識的に声かけするなどの具体的な取組が功を奏してきている。

a) 1年生「いっしょにあそぼう!

Part 1

- どうぞ よろしく -

1年生の友だちの輪を広げ、人と接するときの基本スキルも身につけてほしいと思い、このパッケージに取り組んだ。

まずは、国語科「どうぞ よろしく」とあわせて、自己紹介の「あいあいタイム」をもった。

<基本スキル>

- [1]相手に近づく
- [2]顔を見る
- [3]聞こえる声で言う
- [4]笑顔で言う

以上の4つを段階をおっ

て学習し、また、相手も最初は学級で、次に学年で、その次は、6年生、と変えていった。6年生とは、おにごっこなどのゲームも一緒にした。



・はじめは、やるきはずかしかったけど、あとからおともだちがいっぱいふえてきてげんきになってたのしかった。

・おねえさんといっしょにあいあいタイムをしたたのしかった。
・おにいさんのてがあたたかかった。おにいさんがやさしかった。



6年生とは、この「あいあいタイム」をきっかけに、毎週木曜日の20分休みに合同遊びを始めた。そして、6年生が誘ってくれる喜びや一緒に遊ぶ楽しさを知った。1年生だけでも一緒に遊べるように次のあいあいタイム「いっしょにあそぼう」に取り組むことにした。この取組でも、<基本スキル>を大切にした。

この取組の日常化として、「いっしょにあそぼう月間」を行い、いろんな友だちとたくさんの人数で遊ぶことを取り入れた。2人から3人、5人、10人と遊ぶ人数が増えるにつれ、子どもたちから、「もっとたくさんの友だちと遊びたい」という声があがった。そこで、学年全体で毎朝ドッジボールをすることにした。それでも遊びに入りづらい子があり、2学期は「いっしょにあそぼうPart 2」として相手の気持ちを考えて遊びに誘いあえるような関係をめざしたい。

b) 2年生「いっばい いっばい 見つけた!」

- 友だちのいいところを見つけよう -

校区編成により多数の新しい友だちを迎えた。

出会ってから、まだ間もない時期だからこそ見えること、感じること、思うこと、刺激などを大事にしたいと考えた。(例えば、鉄棒がうまい。文字がきれい。優しい言葉をかけてくれる等)。様々なことを新鮮に感じる事ができる学年当初

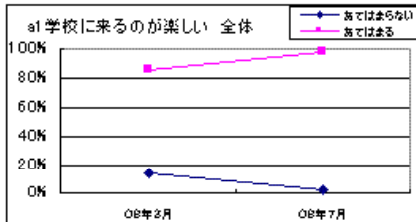
に、素直に友だちの良いところを見つけ、口に出してお互いが伝え合い、今後も、もっと良い面を見つけようという気持ちを持ち続けさせたい。また、周りのものから、自分の頑張りをほめてもら



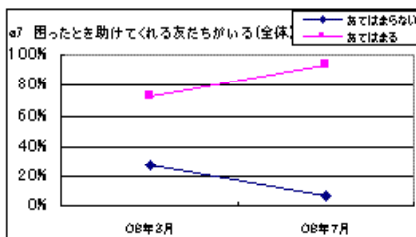
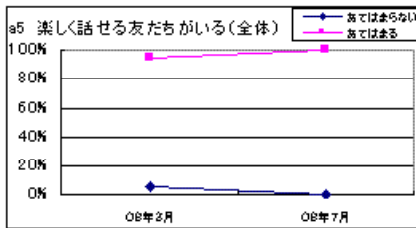
える心地よさを感じさせ、これからも頑張っていこうとする気持ちや自己肯定感を持たせてやることをねらいとし、このパッケージに

取り組んだ。

このパッケージの「友だちの良いところを見つけよう」という課題に対して、子どもたちは、遊んだり話をしたりして友だちとの関わりを積極的に持つようになった。アンケートの、「a1 学校に



来るのが楽しい」「a5 楽しく話せる友だちがいる」「a7 困ったときに助けてくれる友だちがいる」という項目では、90%以上と非常に高い結果がでている。



頑張ったことを周りが見てくれていることで、もっと頑張ろうという気持ちにつながったものと考えられる。

今後も、しっかり遊んで関わり、お互いを認め合える関係をつくり、自分を大切にし友達に優しく接することができる子どもを育てていきたい。

c) 3年生 ~新しい仲間との関係をつくろう~

1学期「みんなとつながろう!」というパッケージで全8時間取り組んだ。今年度、3年生は校区編成や他県からの転入によって新しい友だちを多く迎えた。そこで、1学期は子どもたちがお互いのことを知り合ったり、見つめ合ったりするという機会を「あいあいタイム」の時間にもった。「うしろすがたは誰でしょう」では、



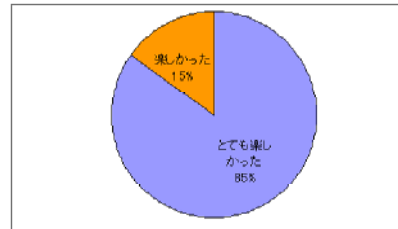
・どっちかわからなかった時にAが教えてくれたからうれしかったです。

・自分の写真が出た時はずかしかったです。

でもちょっとうれしかったです。

・Bがいっぱい教えてくれたからできました。自分の時みんなが言ってくれたからうれしかった。

このような感想から、子どもたちが一つのことを解決しようとするとき、友だちと助け合ったり教え合ったり、力を合わせることでできていた様子



子がうかがえる。自然にお互いのことを見つめることができていたように思われる。

「ふりかえりシート」のアンケートでは、「あいあいタイムの授業が楽しかった」と答える子どもが多く、「あいあいタイム」を楽しみにしていることや、期待する気持ちが非常に高いことがわかる。

今後も、子どもたちがより深くつながっていくことを目標に、友だちと協力して問題を解決していくワーク等に取り組んでいきたい。

d) 4年生 「班のつながりを深めるぞ」

4年生という時期は、まだまだ精神的に幼さが残っている反面、高学年の入り口でもあり、今まで素直にできて



いたことができなくなっていくところでもある。そこで、互いに助け合い、正しいことが当たり前にできることをねらいに、このパッケージに取り組んだ。

取組の流れ

- [1]あいあいキャッチボール
- [2]いつまで乗れるかな
- [3]班対抗 お絵かきリレー
- [4]わくわく席がえ

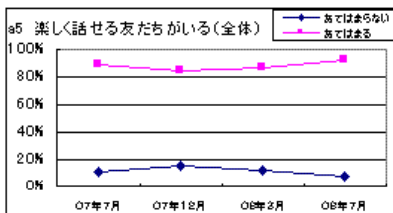
子どもの気づき

・みんなで協力して最後のちっちゃいところまでケンケンでみんながかたをくんでやったからク

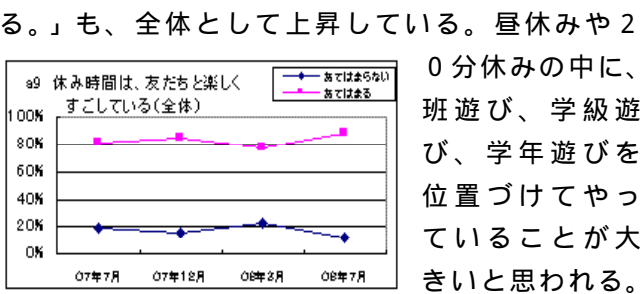
リアできてうれしかった。友達の足の上に自分の足を乗せたり工夫をしたからできてうれしかった。友達のいいところが分かった。

- ・ Aさんがきつく言ってきたけどあんなに一生けんめいになっているのをはじめて見た。班で協力するとき今日みたいに一生けんめいになってほしい。また協力するゲームをしたい。
- ・ 答え合わせをして全部あってたからうれしかったです。班の人と協力してできたからよかったです。カードに友達のよいところも書いていたから、みんないいところがあるんだなあと思いました。

自主的活動の時間的保障が困難な今、子どもが本音を出し、協力し合える場面を設定してやる必要があると思われる。ぶつかりあう中で互いに思いやる心を育ていくことを大切にしたい。



「a5楽しく話せる友だちがいる。」も「a9休み時間は友だちと楽しく過ごしている。」も、全体として上昇している。昼休みや20分休みの中に、班遊び、学級遊び、学年遊びを位置づけてやっていることが大きいと思われる。



集団が「好きなものどうし」や排他的な集団にならないようにするため、遊びの組織化はこれからも続けようと思う。

e) 5年生 『いろいろなコミュニケーション』

5年生になり、係活動や班活動など自主的に活動する機会が多くなった。また、夏休みの前半には林間学舎もある。そのようなグループ活動では、「力を合わせる」「お互いに補い合う」「自分から関わり合う」ことが大切であり、そこに気づかせたいと考えて本パッケージを設定した。

パッケージ全体を通して、見てはいけない、動いてはいけない、話してはいけないなど、普段何気なくできていることに制約を設け、ことばに身ぶりをつける、相手に手をそえて導く、役割分担するなど、いつも以上に丁寧に関わる必然性が生まれるようにした。

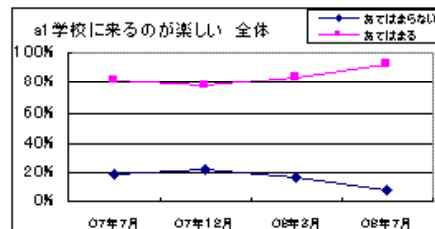
また、多くの活動を少人数でのグループ活動にすることで、[1]少人数だと視点が絞られ友だちのよさが見えやすい[2]ひとりひとりが実際にやっ



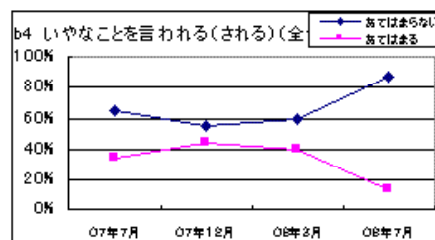
てみる機会が多くなる
[3]グループ活動での達成感を味わうことができる、ということを重ねた。

子どもの気づき

- A：目かくしで見えなかったのだからちゃんと行けるか不安だったけど、Bを信じてみるとちゃんと行けました。
- B：Aをつれて行くときに、肩を持って行きました。いろいろ工夫するとできるもんやなと思いました。
- C：むずかしそうでどうしようと思ったけど、みんなと相談するとだんだん不安が消えました。
- D：途中でペアの組み方が間違っていて、いったん戻って話して解決してまた進んでいったのでゴールできてよかったです。
- E：何度も失敗したけど、自分も友だちもあきらめなくて最後はちゃんとできました。
- F：失敗したときに「もぉ」って言っちゃって、ごめんねと思いました。
- G：またちがう班になっても、今日みたいなあいあいタイムに挑戦したいです。



1学期末のアンケートでは、悩みが全体的に減少し、学校での人間関係が良くなってきていることが感じられる。ストレスの対処については変化がなく、



今後の課題である。

f) 6年生 『キラリ 輝け』

これまでの取組や「あいあいタイム」を経験する中で、集団としての高まりを見ることができる。しかし、子どもたち個々人の人間関係に目を向けるとその希薄さに気づく。周りの友達からの視線を気にしたり、自分の立場を守るために一人の子を無視したり、おとしめることでつながろうとする姿も見られる。自信のなさが原因となり、本音を出し合えない表面的なつながりに終始している

ように思われる。

そこで本パッケージでは、子ども自身が自分を客観視することにより、自分の持つ力やよさに気づき、さらに課題が明確になるよう工夫した。



また友達から自分のよさを評価されることで、自信と自己肯定感を高めることをねらいとした。

子どもの気づき

《自分自身への気づき》

- ・自分にもいい所がたくさんあってビックリした。自分の事が少し分かったような気がした。もっと自分のことを探していきたい。良いこともしているけど、良い事じゃない事もしているから、そこを減らしていきたい。たぶん自分を変えられると思う。今日は自分の事が分かってよかった

《友達からのフィードバックを受けての気づき》

- ・自分のイメージとちがうところがいっぱいあって、びっくりした。でもちょっとだけ自分に自信がついた
- ・みんなが見つめてくれた良さを忘れずに、大事に持っておく。みんなの想いを私も思って、これからも、いい所をいっぱいみつけるようにしたい

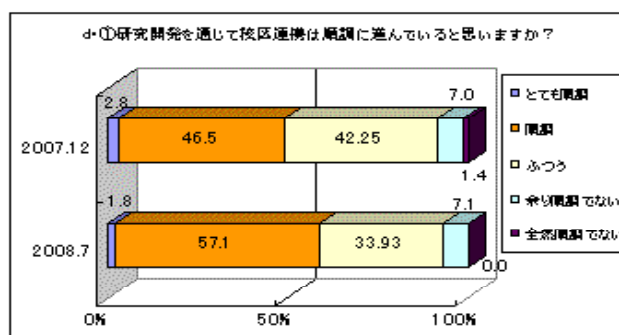
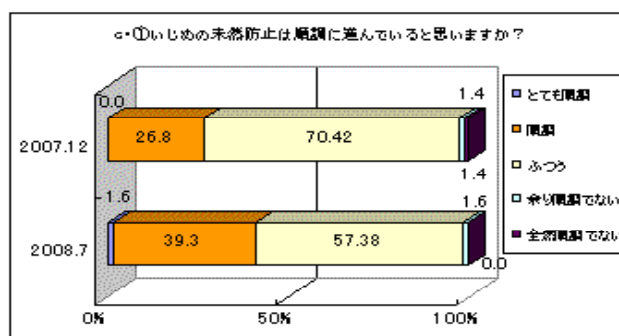
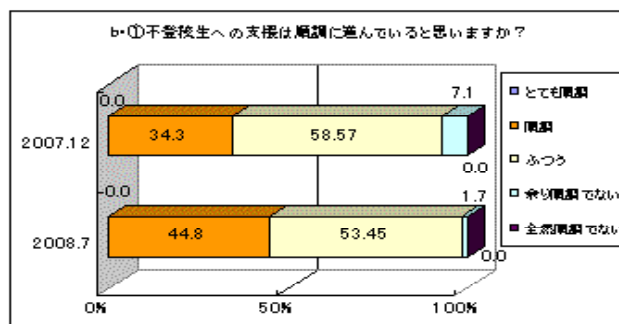
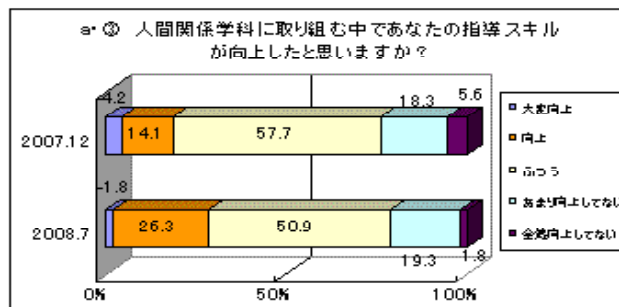
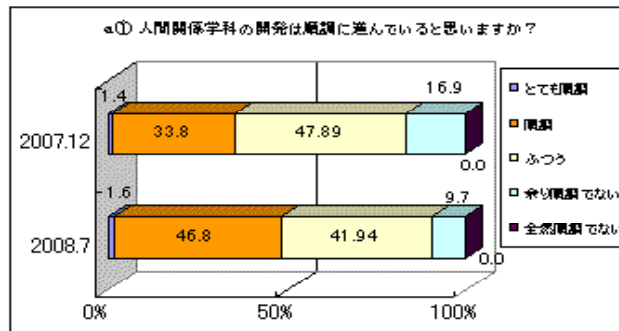
「あいあいタイム」を続けて取り組む中で、お互いの良さを見つけたり自信をつけてきている子どもが多く見られる。ストレスは減ってはいないが、気持ちのコントロールができるようになってきている。今後も協力しながら互いに高め合えるような取組を続けていきたい。

2. 教員のアンケートから

松原七中での研究開発は二年目に突入した。本年度は、校区の人材交流、校区合同研究協議、校区合同研修に取り組んできた。本年度後期からは、子どもたちの校種間交流も予定している。研究開発中間発表会の研究紀要作成に向けて、校区の教職員からアンケートをとった。昨年12月の一年次報告書作成に向けて実施したアンケートとの比較グラフから、教員にとっての進捗度を見ていく。

人間関係学科の開発、人間関係学科の指導スキル、不登校生等への支援、いじめの未然防止、校

区連携と進捗度を調査した5項目すべてにおいて、順調あるいは向上と回答した教員が前回は上回った。何がどう順調で、どうなれば向上なのか



という尺度はあいまいなものであるが、教員が感じている度合いとしては、昨年12月よりは向上しているということであろう。しかし、校区連携の58.9% (1.8% + 57.1%)を最高値

として、他の4項目は5割にも足りていない。まだまだ、校区の研究開発が教員みんなのものになりきれていないことを表していると言える。

その中でも、注目すべきところが、指導スキルの向上である。進捗状況に関する質問の中で、この質問のみが教員個人に問われている質問である。しかし、この質問は特に個人相対的なものであり、判断の尺度も個人が感じた部分にゆだねられている。人間関係学科は、子どもたちの変化や成長を促す教科である。子どもたちが持っている内に秘めている人間としての力を「気づき」を通じて引き出し、子どもたち自身が自らエンパワーするものである。それは、教員から子どもたちへのフィードバックとして子どもたちの成長を映し出しているから実現できることである。この紀要の中で、効果測定として様々なデータを取りあげ、分析することで子どもたちの成長を確認してきた。おそらく、ほとんどの教員が人間関係学科の実施を通じてスキルアップしているのは間違いないのだが、問題は、我々一人ひとりが人間関係学科の精神に則って「お互いのフィードバック」を交換しあったかどうかである。お互いがお互いを映しあい、お互いの変化を「わかちあえている」かどうかではないだろうか。人間関係学科に取り組んで、子どもと子ども・子どもと教員の間に良好な関係を築くことができた。教員と教員の間にも良好な関係をめざすことが、人間関係学科の目的でもある。相手に対して「攻撃的」であってはいけなく、「受け身的」であってはいけなく、自分も相手も納得のできる結論と建設的な結果を導き出すことのできる「アサーティブ」な関係こそが、我々がめざすべき関係ではないだろうか。

以下、アンケートに文章表記されたものを、掲載して成果や方向性を見ていきたい。

人間関係学科の開発について

- ・子どもたちの実態を把握し、それにあったプログラムをつくること。日常的な取組に結びつける。
- ・他の学年のあいあいタイムの授業を見せてもらうなどして、より有効なパッケージや指導方法を探ることが大事ではないか。
- ・小学校中学校の先生方とさらに交流し、幼稚園の保育内容について理解して頂き連携を強める。
- ・子どもの発達にあったプログラム、ワークが必要。今必要なスキルの向上のために何が必要かを十分討議し、子どもの今に適した学びを提供する。

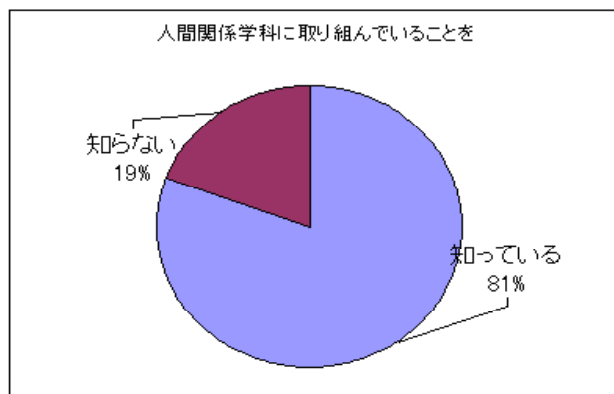
不登校生等への支援について

- ・複数の教師の目でその子どもを支援していくことが必要。
 - ・それぞれの子どもへの明確な支援目標をたてる。
 - ・原因を改善していけるよう関係諸機関との連携
 - ・不登校生本人はもちろん家族への組織的支援や外部諸機関との連携を強化すべき。
 - ・校内、校区の情報交換をさらに強化していく
 - ・学年や性別の違う不登校生を同室にすることがむずかしい。別室登校生が増えた時の場所を確保する。
 - ・生徒の変化・実態にすぐ動ける体制をつくる。
- #### いじめ未然防止について
- ・変だなと思う事象を見逃さないよう、子どもの様子をしっかり見ること、子どもとのコミュニケーションを大切にすること。
 - ・複数の目で子どもたちを見て、交流し合える体制づくりが必要。
 - ・いじめを許さない毅然とした教師の態度を取り続ける。
 - ・仲間を大切にすること仲間と共に歩むこと、仲間に働きかけができること、仲間と向上し合うというようなことをキーワードとした集団づくりに取り組む。
 - ・友だちとはそれぞれに違う考えがあることを伝え、自分と違う考えを認め、自分の気持ちを理解してもらうことの大切さを子どもたちに話すことが大切です。
 - ・人間関係学科の中でスキルの向上をはかること
 - ・気軽に相談できるような雰囲気や人間関係、機会をつくる。
 - ・あたたかい人間関係のあるクラスづくり、一人ひとりが自信や達成感を持てる場をつくる。
- #### 校区のつながりや交流について
- ・会議、合同研修、懇親会などで連携をとる機会が増えた。
 - ・校区で合同授業に対する協議ができた。
 - ・HRSやあいあいタイムの取組の交流から子どもの具体的な状況の情報交換ができつつある。
 - ・小・中の授業を見たり、先生方と話をする機会が増え、幼稚園との違いや共通点に気づきかけができた。
- #### 研究開発を進めていく中で
- ・あいあいタイムの授業案を考えて実施するのは大変だが、子どもたちの実態を自分自身がよく見ようとするようになった。
 - ・仕事の量が増え、忙しい日々を過ごしたが子ど

もたちはあいあいタイムを楽しみにしており、いい表情で1学期を終えることができました。

3. 保護者のアンケートから (2007年12月)

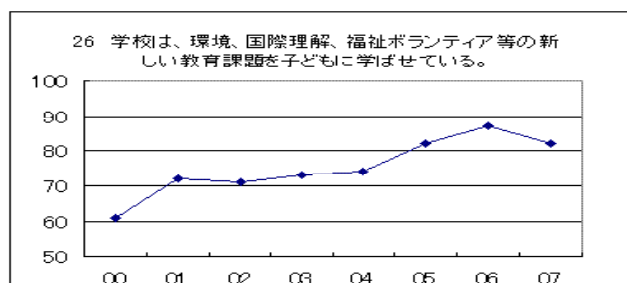
松原七中校区では、12月に毎年、学校教育自己診断アンケートを保護者・子ども・教員に対して実施している。それに加え、昨年度は校区研究開発の初年度ということもあり、同じ12月に人間関係学科アンケートを保護者対象に行った。その結果をまとめていきたい。



上のグラフは、人間関係学科の認知度を表しているが、81%の保護者が人間関係学科に取り組んでいることを「知っている」と答えている。

校区にむけては七中校区地域教育協議会の予算総会において、幼稚園・小学校・中学校の教員によるロールプレイに取り組み、人間関係学科(HRS・あいあいタイム)の情報発信を地域にむけて行った。小学校・中学校では、保護者の授業参観にHRSの授業を実施したり、中学校では参観後の懇談会でワークを披露した学年もあった。

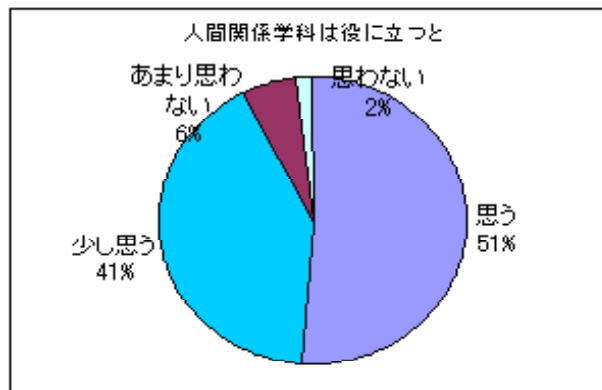
このグラフは七中において毎年実施している学校教育自己診断(保護者向け)における「学校は、



環境、国際理解、福祉ボランティア等の新しい教育課題を子どもに学ばせている」の項目の推移である。小学校においても同じアンケートにある「学校は豊かな心をもった子どもを育てようとしている」の項目で74%の数値に達している。

次のグラフは、「人間関係学科は役に立つと思

うか」という問いに対するグラフである。今の子どもたちにとって身につけるべき力を学べる時間としての期待が強いのではないだろうか。実際の保護者の声をいくつか紹介しておく。



- ・ 人との関わりは、直接相手と話すことによって理解しあえるということ、子どもに指導して頂きたいです。子どものころから、携帯メールやパソコンでのメールのやりとりを中心とした人間関係では、バーチャルな世界で生きていくことになりかねません。(大人になったときに)
- ・ 一人の心ない言葉や態度ですごく“キズ”つくことがあります。どんなに忙しくてもどんなにいやであっても相手に対して誠実に心を込めて対応の出来る、お互いが謙虚な態度で接して頂ける、そんな人間関係を結べるような子どもに育てられるよう、これからもたくさんアドバイスして頂けたらと思います。(もちろん家でも教えていきます!!)
- ・ いつ、どんな所でも自分の意見が言え、相手の意見が聞けるような関係、相手の気持ちになって行動ができるように。
- ・ 先日の参観で初めて「あいあいタイム」という授業をしているのを知りました。学校通信などで年間通しての内容やスケジュール、目的といったものを知らせてもらえたらうれしいです。
- ・ 大人でもコントロール(気持ちを)することが難しいことで、少しでも人の気持ちを考えながら成長できる時間になればよいと思っています。
- ・ 今の子どもたちは、親をはじめ、まわりの大人たちが良かれと先々に何でもルールを引いてあげているので、自分で考えて行動することや、友だちの接し方などが難しいように見えます。生活の中で色々経験し、自分でやってみる、考えてみるという力をのばせるようにご指導いただけたらな、と思います。
- ・ もっと授業数を増やせるものなら増やして欲しいと思うくらい、大切な授業だと思います。「個

性を認め合う力」や「人生の中では色々な選択肢がある事」や、「逃げる、避ける事も選択肢の一つ」等、いろんな方向からいろんな見方、考え方がある事をたくさん教えてあげて欲しいです。

- ・上の子が七中に通っていた時にも何度か人間関係学科の授業を参観しました。今の時代、こんな事まで学校で教えなければならないのかと驚くと同時に、これから生きていく上でとても大切な事ばかりなので、積極的に取り組んでほしいと思います。
- ・本来であれば家庭で試されるべき事を学校でもらわないといけないのは残念。親がもっと学ばなくてはいけないと思います。子どもは家庭を映し出す鏡のようなもの。親にも色々な意見なり要望を発信して行って下さい。
- ・子どもから人間関係学科の授業が楽しみだと聞いています。これからも楽しみながら真剣に取り組めるよう、永く続けて行ってほしいです。



懇談会でアイスブレイキング



保護者の方もストレスチェック

・ 研究開発実施上の問題点 及び今後の研究開発の方向

1. 実施上の問題点

1) いじめへの対応・不登校生への支援の取組における問題点

ひろがる生活破壊

- ・校区においては年々、ひとり親家庭、保護家庭の率の増加が進んでいる。生活状況の変化や経済的な問題が保護者を苦しめ、子どもたちを取り巻く環境に大きく影響している。子どもたちの中にはストレスが増加し、自己肯定感への影響も大きい。保護者へのソーシャルワークや関係諸機関との連携がより重要となってきた。

人間関係の希薄化

- ・核家族化と少子化の進行による「家庭」の変化やゲーム、携帯といった情報機器の氾濫が子どもたちの関係に大きな影響を与えている。そこから生まれる人間関係の希薄化や人間関係への不信が、子どもたちの自己肯定感や社会的有用感育成の妨げとなっている。人間関係学科の実施を通じて、子どもたちにコミュニケーション力をはじめとする生き方にプラスになる様々な力を身につけさせたい。

小中のギャップ

- ・子どもたちの生きていく力が低下してきたことにより、小学校から中学校への進学の際に、それが不登校やいじめという形であられるということも明らかになってきている。今回の研究開発では、小中合同で小中のギャップというものをとらえ、双方どのようなアプローチでその課題を埋めていくかということを研究としていきたい。

2) 人間関係学科推進上の問題点

学校生活調査・生活アンケート等の集約・分析方法

- ・2003年度からの松原七中での研究開発の成果から、子どもの実態把握、効果測定のための、アンケート調査・データ分析が有効であることが明らかになった。しかし、この有効性を校区で確認し、実施していくまでに時間がかかった。
- ・効果測定を校区や各校で組織的に取り組んでいくための、小・中共通の基礎データのフォームが必要である。調査毎のデータ一覧は作成しているが、子どもの変化や成長を見ていくための

推移が確認できる資料を三校合同でもつ必要がある。

合同の会議・研修

- ・松原七中校区で実施する研修や会議と各校の学校・学年行事の調整の難しさがある。月一回の校区研究開発企画委員会の開催も、時間の確保が難しい。また、それに向けての各校担当者の打合せも同様である。
- ・研修の設定においても、各校の状況の違いやニーズの違いにより、課題設定の難しさがある。また、各校個別の研修においても、研修内容の共有化や、方向性の統一が課題である。

教員のスキルアップ

- ・人間関係学科は、ワークショップなど参加・体験型の学習を進めるため、新しい学習スタイルを学ぶ必要がある。「場づくり」「ねらいの共有」や子どもの「気づき」「ふりかえり」を大切にしていくためのスキルアップが不十分である。恵我小・恵我南小では、研修を積み重ねながらも初めての取組であることでの戸惑いは大きい。また、松原七中は、教員の入れかわりによる世代交代により、これまでの成果をこれからの世代の教員へとどうつないでいくかが問題となっている。

2. 今後の課題

1) いじめ・不登校の未然防止のために 松原七中校区としての不登校生等支援

- ・松原七中校区不登校児童・生徒支援会議を中心に、不登校を未然防止し、不登校生を支援していくための共通認識を七中校区の教職員が持つ必要がある。欠席者・遅刻者の実態把握、支援の具体的内容などを各校で方針化し、校区で共通認識を得るための体制づくりを行う。

いじめの未然防止と子どもたちへの支援のために

- ・松原七中における人間関係学科の創設と不登校生への支援から始まった、子どもたちが「楽しいと思える学校づくり」が子どもたちどうしの関係性、子どもと教師の関係性を強めてきた実績を、校区で更に検証していく。

2) 人間関係学科に取り組む上で

1 1年間のカリキュラム創造

- ・恵我小・恵我南小における本年度のプログラムづくりの成果にたつて、小学校の発達段階における6年間のカリキュラムづくりに着手する。

- ・松原七中においては、現在あるカリキュラムを、小学校のプログラムを発展させたものへのつくりかえや、ターゲットスキルを読み替えることにより、小学校からの積み上げをはかる。また、「自分と社会をつなげていく力」を養うための、スキルアップしたワークづくりに取り組んでいく。

- ・子どもたちの社会的有用感を育て、地域において子どもたちが人間関係づくりの主体者となるように、幼・小・中の子どもたちのつながりをつくっていく取組からはじめ、大人と子どもがつながっていくための取組も追求していく。

- ・恵我幼稚園と連携し、就学前における「あそび」から人間関係づくりにつなげていく視点と、小中における人間関係学科とのつながりを追求する。

人間関係学科実施に向けた教員のスキルアップ

- ・人間関係学科の授業を実施する教員の力をつけていけるために様々な研修を計画したり、自己研鑽を進めていくことが必要であるが、それだけではなく、専門家からのスーパーバイズを含めた組織的なスキルアップの体制づくりを行う。

継続的・効果的なデータ集積・分析を行う

- ・現在、実施している学校生活調査・学校生活アンケート、ふりかえりシートなどのデータを、子どもへの支援やプログラム作成に生かすことができるようなアンケート調査をする必要がある。

- ・恵我小・恵我南小において自己肯定感の測定に有効なアンケート項目の設定や実施方法の具体化を行う。

- ・子どもたちのソーシャルスキルや学級・学年集団における子どもたちの満足度や効力感を測定していくための新たなアンケート調査を試行する。

他領域（「道徳の時間」「総合的な時間」「特別活動」「教科授業」など）とのリンクやつながりを追求する

人間関係学科実施の指針の確立をめざす

- ・松原七中校区において、研究開発後も人間関係学科に取り組むためだけではなく、他校区でも実施可能にするべく、「人間関係学科指針(仮)」を作成するための基礎づくりに取り組む。

- ・そのために、心理学、社会学、教育学、ファシリテーションなどの研究者や実践者との連携に取り組む。